

筑後蔵空米切手考

— 西国大名経済と堂島 —

鶴岡実枝子

はじめに

- 一 久留米藩前・中期の財政事情
- 二 後期の財政収支
- 三 蔵出延滞事件で具現された筑後蔵の内情

- 四 筑後蔵における手津屋の役割
- 五 空米事件落着の経緯
おわりに

はじめに

江戸時代の堂島米市場の機構を解説した「難波の春」に次のような一節がある。

過切手と云ふ事あり、是は蔵にある所の米より余分の切手を売出す事なり、正米引替も一時に来るものなければ、それを見込んですることぞ、しかし、これはかねて触渡しもありて決してならぬ事なり、何ぞ故障出来て露顯すれば、急と吟味になり、容易ならざる筋なれば、どこ迄もなき事にて不融通の向にては、又ままたある事といふ、買持米杯は肥後・筑前・中国・広島等の切手にて買持つ様に触渡しありし事もあるよし、右の四ヶ国に統いては、肥前・夏は加賀米なり、文化の始頃杯には、右の六ヶ国より外には慥なる切手は無き様にもいひしとぞ、不慥と云ふは、則ち過切手があらんといふことぞ、右の訳故、時勢により慥かとおもひしが、不慥になること

もあるべし、扱右の通り故、蔵払新米、建替前には是非過切手は買戻さねばならぬ事なれども、元隠し事の上、買戻す様に堂島へ知れては其国の米俄に相場上り、蔵屋敷へ損をさす故、種々極密の手段を以て買戻すよしなれども、仲間もまた色々工夫をして嘆き出し、相場を上ぐる事、毎々ある事とぞ、是等も人氣の寄りてたつ、正路の相場にあらず、不時の不正相場なるよし⁽¹⁾

幕藩体制社会の市場構造の中核として位置づけられる大坂の堂島米市場が果たした機能については、筆者は充分以前に旧稿で検討したことがある。⁽²⁾それは単に堂島が当時の最大の領主米の販売市場であり、幕府に貨幣発行権を独占されていた諸大名の正貨獲得の場であったという問題だけではなく、諸藩の蔵屋敷が発行した諸種の米切手によって展開された大名金融市場として位置づけられたことを、入替両替商加嶋屋長田家文書によって、拙いながら検証したつもりである。

その際、当時大坂において両替商を枢軸として極度に発達した信用制度が、堂島における米切手を媒介とした証券市場を展開せしめ、幕府の禁制にも拘わらず過米切手の発行が可能であったこと、それによる越年米の擬制的な膨張を指摘した。このことに関しては、大坂堂島における米の需給関係が、どのような要因によって規定されたかという、堂島の需給構造の解明を数量経済史の分野から検討された宮本又郎氏の批判がある。⁽³⁾すなわち、宮本氏は大阪における米穀の需給関係を示す指標としての「越年米高」の動きと、米価の動向との相対的関連性を追求され、大名の年貢米の販売行為は、筆者が主張する堂島の大名金融と結びついた硬直性よりも、より市場経済法則が先行することを指摘される。氏の論考には傾聴すべき論証が多々あるが、筆者が旧稿でとりあげた諸種の調達切手のうちには、出切手による大名金融が尠なからずあったことを指摘したつもりであるが、その点について誤解があるようである。小稿では文化十一年に堂島で大量な過米切手発行によって取付事件を惹き起した久留米藩（筑後蔵）を素材に、堂島に

おける過米切手の一般性——少なくとも小稿でとり上げる西国大名による大坂廻米は、極端に云って過米切手の引換準備米としての意味をもつものではなかったかということ——、その過米切手が堂島市場で許容された条件と、幕府の対応などの歴史過程を辿る中から、一九世紀前期の西国大名経済に果した堂島の位置づけについて再考してみたいと思う。以下、本題に入る前に、久留米藩の成立以後、文化期の破局状態に至るまでの藩財政について一通り俯瞰しておこう。

注

(1) 島本得一「堂島米会所文獻集」所収。島本氏の解題に

よると、同書は「温知叢書」所収の「八木のはなし」と殆ど同一で、嘉永頃の成立とされる。

(2) 拙稿「一八世紀以降の大名金融市場としての堂島——

借銀担保の米切手をめぐって——」(史料館研究紀要「第二号」)

(3) 宮本文一郎「近世米価の変動と大阪における米穀需給

——大阪米価・全国米価・大阪越年米高の動き——」

『大阪大学経済学』第二五卷第二・三号)

一 久留米藩前・中期の財政事情

元和六年、筑後一国三十二万五千石の領主田中氏(居城は柳河)除封のあとを受けて、丹波福知山から入封した有馬氏によって成立した久留米藩は、表高二十一万石、現実の年貢徴収の基準となった入封当時の内高は三十二万六百四十七石余とされる。この内高の査定については、諸書の伝えるところによると元和七年初入国の有馬氏が領中に命じて提出させた書出を基準に五割を加えた数字と云われ、この内検高に三ツ七歩の貢租を二カ年課したところ、重課に喘ぐ村々が出たため、同九年四万石余を免除し、二十八万六百四十七石余を「本地の高」にしたと説明されている。⁽¹⁾

この伝承の示すところは、有馬氏入封時の内高の設定が可成り杜撰かつ強引なものであり、どれ程現実の生産力に

照応したものであったか、疑問が多いということである。

『久留米小史』には、その後正保・寛文・延宝の間に精力的に進められた筑後川その他の治水・用水工事によって、水田の拡張が大規模に進行したとされ、元禄時の幕府への届出には、出目高・開高の合計が二万九千石余とあり、正徳四年の竿入を経て幕末の内高は廃藩置県時の記録で、拝領高をうわ廻ること十五万六千石余の三六万六二七一石余、村数も五四七カ村と二二カ村の増加を示している（第1・第2表）。

天明期にほぼ頭打ちとなった内高の増加は、それ以前における領主の絶え間ない増徴志向に支えられたものと思われるが、「御旧制調書」によれば、久留米藩の財用不足は早くも明暦元年三代藩主頼利が四才の幼年で襲封した時に始まるとされている。

入封間もない寛永初年の飢饉・洪水・蝗害と大坂城・江戸城御普

第1表 久留米藩内高の推移

拝領朱印高	210,000石
元和9年内検高	280,647
(元禄度・出目高)	11,201石余)
(元禄度・開高)	18,100 "
元禄度惣内検高	309,959 "
正徳度	328,600
天明度	364,086
天保度	364,955,680
明治4年	366,271,710

『久留米小史』その他より

第2表 久留米藩拝領高と幕末内検高の比較

郡名	村数		石高		石高の増加率
	寛文印知	明治	寛文印知	明治	
御井	71	72	36,165.120	56,528.330	56.3%
御原	35	36	20,587.430	33,304.900	61.8
生葉	54	59	12,675.837	26,882.990	112.0
竹野	89	89	12,397.812	22,875.120	84.5
山本	30	30	12,474.145	16,559.700	32.8
三潑	128	137	75,389.341	118,724.580	57.5
上妻	93	97	25,169.425	69,005.180	174.1
下妻	25	27	15,140.863	22,390.910	47.9
計	525	547	210,000.000	366,271.710	平均74.4

『寛文度朱印留』（史料館蔵書1）、木村稔校訂『旧高旧領取調帳』より作成、なお木村氏『旧高旧領調』の久留米領高の集計は332,966石810となっている。

請役(寛永七・同一一年、寛永一四・一五年の島原一揆への出陣等、西国大名に共通する事由ではあるが、久留米藩は成立当初から財政圧迫の要因が多く存したと思われる、「国用不足」と記録された明暦前後には、藩主の相次ぐ卒去(初代豊氏は寛永一九年没、二代豊頼は明暦元年没、三代頼利は寛文八年婚姻の年没)、たび重なる江戸屋敷の類焼(明暦三・万治二・寛文九年)、領内の水害等、天災・人災は枚挙に暇がない。⁽³⁾「米府年表」には、尾州侯息女が入興の延宝二年、在町よりの先納銀のことを記し、翌三年御勝手方差支えにつき家中上米が始まっている。簡略令の発令も効なく、延宝五年七月には大借のため、上方における御用銀才覚も不調となる行詰りをみせ、天和元年銀札遣いが始まっている。

この早い時期からの財用不足の実態を「大積り」という予算書の数字で俯瞰できるのは「御旧制調書」の元禄二年・同七年分を対照させた「御勝手方惣御積」が最初のもののようである。

なお、現在久留米市民図書館所蔵の「有馬家文庫」中の「御旧制調書」の成立については、筆者が採訪の際、時間的制約から全冊を通覧できなかったため、断定は憚られるが、「久留米藩一夕譚」中に、十代藩主頼永公の時、家中村上守太郎・野崎平八の両名が御旧制調役に任せられ、豊氏公以来の藩制規則を悉く編集したことが述べられており(「久留米市誌」下編四〇七―四〇八頁、四一三頁)、天保一五年襲封直後から大倭令を以って勝手方の大改革を志向しながら、治世僅か三年で没した頼永の命によって編集されたものと思われる。ただこの「御旧制調書」に断続的に収録された元禄以降の藩財政収支は、何れも予算書と覚しく、何故決算書が提示されていないのか疑問の多いところである。或いは後段で検討する大阪での蔵米販売上の諸種の操作が決算書の作成を困難にしたと推測するのは穿ち過ぎであろうか。他藩の事例と共に後考に俟たいと思う。

「当十月より来九月迄御物成・夏成銀品々集銀ヲ以、江戸大坂久留米御入用銀并借銀御払方指引凡積」と頭書された該予算書は、元禄三年度は同年十一月十八日、同七年度は同十月廿二日の日付で作成されており、米方分については

第3表 元禄3・同7年御勝手方惣積（「御旧制調書」上）

		元禄3年	元禄7年
米 方 収 入	物成（御蔵入本地・口米共）	石 44,019.720	石 44,395.030
	〃（明所方口米共）	7,309.900	6,677.330
	〃（本地出目・口米共）	2,941.660	3,022.960
	〃（開方口米共）	6,211.450	5,015.130
	〃（給知畠田出目米口米共）		1,959.090
	御蔵給知共一分通差上物成口米共		2,806.800
	五分御借米2000石利足	2,938.400	2,938.400
米 方 支 出	計（米大豆）	63,421.130	66,814.740
	俵ニ換算 A	192,185俵	202,468俵
米 方 支 出	米大豆品々御払方	91.080俵	92,580俵
	上方借銀返済分	20,000	20,000
	計 B	111,080	112,580
	残て（A-B）C	81,105	89,888
銀 方 収 入	幕物成米大豆（C）代銀	872,700 ①	1,045,650 ②
	米夏成銀	250,000	250,000
	薪代銀納（五カ年平均）	32,830	32,630
	他領出俵物印銀（同上）	10,180	10,180
	千石夫銀	50,000	50,000
	小物成奉行可納分	11,870	11,870
	山奉行可納分	5,850	5,850
	竹奉行可納分	12,400	12,000
	縮奉行可納分	2,230	2,230
	在方ノ可納品々運上銀	38,000	38,000
	給知苦勞銀	17,800	17,800
	御家中役銀	40,000	50,000
	山札銀元利之内	53,000	20,000
	四歩銀元利之内	20,000	10,000
	在々年延御借米銀可納分	10,000	
	御家中上ケ米	133,200	175,000
	計 D	1,560,060	(1,731,210) 1,731,810
	江戸御入用銀	1,204,750	1,265,000 ③
	参観御供衆苦勞銀・御借銀・売延米代銀等	338,000	298,000
	参観之節雇水主借船賃	35,000	30,000
	同 船中・道中入用	50,000	45,000
	同 江戸着座入用	39,000	35,000

第3表 (続き)

		元禄3年	元禄7年
銀 方 支 出	京 都 具 服 代	90,000	68,800
	茶屋四郎左衛門御合力金	9,000	6,000
	大坂御屋敷万払方	46,000	58,900
	在国御作事方并船鍛冶方	95,000	55,000
	二月・八月造用夫銀	30,000	30,000
	北 国 材 木 代	10,000	
	久留米ニて万御買物代	130,000	49,300
	〃 御銀奉行直払	60,000	68,300
	長崎ニて御買物代銀	30,000	40,000
	御 道 具 代 銀	50,000 ④	100,000
	京大坂御借銀年賦分	421,600	924,700
	江戸御借金4000両の利銀	42,900	36,000
	伊予様へ御合力銀并米大豆700俵		18,000
	計 E	2,681,250	(3,128,000) 3,228,000
	御不足銀 E-D	1,121,190	1,496,190

注 ① 午暮物成米 61,105俵×⑩11匁50, 同大豆 20,000俵×⑩8匁50
 ② 戌暮物成米 67,880俵×⑩12匁 同大豆 22,000俵×⑩10匁50
 ③ 在国入用銀を含む
 ④ 伊予様・采女様・大樞三右衛門殿入用銀
 なお元禄7年銀方集計の()内の数字は筆者計算

一応収納が完了していたとみられる(第3表)。なお久留米藩における地方知行から蔵米知行制への移行は宝永7年とされており、元禄期の収納米は蔵入分に限定されるわけである。

「御旧制調書」によれば、

春林院様(初代藩主豊氏、治世寛永七一寛永一九年、引用者注、以下同)御代御家中知行高十一万九千石余
寛永十年御高二十七万九千八百七十石と申候
 寛永十年御高二十七万九千八百七十石と申候

瓊林院様(二代忠頼、治世寛永一九―明暦元年)御代御家中知行高十五万五千四百二十二石と相見、其他御用度之數相分不申候とあり、初代の寛永十年には蔵入地と給知高の割合は五五・四と四四・六となっているが、二代藩主の時期に給知高が二万六千石以上増加し、さらに寛文六年一五万九、九九二石と前期には給知高が漸増傾向にあったことが知られるが、新開・出目高を含めた蔵入地との比率は確認できない。元禄三年の予算書には物成高の各項目に免率の記載があるので、当時の蔵入地を推算してみたのが第4表である。最下段の葭・茅野開畠田成について

第4表 元禄3年蔵入地推計

	免 率	物成口米共	蔵 入 地 高
御 蔵 入 本 地 方	0.3548526	石 44,019.720	石 119,263.600
明 所 地 方	0.366736	7,309.900	19,167.575
本 地 出 目	0.5543315	2,941.660	5,102.590
開 方 方	0.2544539	2,378.420	8,987.785
葭・茅野開方畠田成	?	3,833.030	?
計	平均 0.383	60,482.730	152,521.550+α

「御旧制調書」+(久留米市民図書館所蔵有馬家文庫)

口米は物成の0.04として計算

は免の記載がなく、蔵入地分の合計石高は判然しないが一五万四、五千石とすれば当時本地高(内高)の五〇%程度と推定される。免率は地目によって差があるが、本地出目が五五%と最高で、平均三割八分三厘という免率が得られる。

各地目の物成米のほか、御借米利足(七年度は一分通差上物成が加わる)を加えた米方収入の総額は一九万二〇万俵(大豆共)の規模であり、現物払いと上方借銀返済分(二万俵)を差引いた販売可能量は八〇九万俵の間であり、元禄三年については米一石(三俵)三四匁五分・大豆同二五匁五分、同七年については米三六匁・大豆三一匁五分の単価計算で、銀方収入の最初に計上されている。

元禄三年の銀方収入の総額は一、五六〇貫目余であるが、そのうち米・大豆の換金分は五六%弱、夏成銀(大小麦・菜種銀納分)小物成その他を含めた租税収入は一、二八六貫目余で全体の八二・四%を占め、残りの一七・五%は家中・在方へ強制的に転嫁された負担増である(第5表)。銀方支出についてみれば、江戸入用

第5表 元禄3年銀方収入(予算)の構成

費 目	銀 額	構 成 比
物成米・大豆換金分	872,700	55.9
夏 成 銀	250,000	16.0
小物成・運上・夫銀等	163,360	10.5
家中中ヶ米	133,200	8.5
家中役銀・苦勞銀	57,800	3.7
在々御借米其他元利	83,000	5.3
計	1,560,060	99.9

銀が圧倒的に大きな比重を占め、參觀交代に係る諸費用を加えれば、そのみで銀方収支は赤字となる状態で、最終的に計上された不足銀は、元禄三年一、一二一貫目余・同七年一、四九六貫目余とされ、これを各年度の換金米単価で換算すると、三年度が九万七、四九五俵・七年度が一二万四、六八二俵分に相当する。もちろん予算書という性格上米価の浮動性を考慮すれば（蔵米の販売地は不明であるが、恐らく上方⁽⁵⁾、幾分かの修正が見込まれるが、当時の蔵入分の収納米が二〇万俵前後であったから、少くとも一・五倍以上の収納が必要とされていたわけである。元禄三年の大積の末尾には「紙面之通不足銀相見候、先年勝手積以後相増候而巳ニ而減候儀無之」とあって、借銀が年々累積する一方であったことは、七年度の見積書の数字が裏付けている。

正徳元年、六代藩主則維による御勝手方直裁の宣言に始まる正徳の改革は、大幅な増徴を目的とした税制改革に最大の眼目が有したとみられている。久留米藩において承応三年以後実施された土免制の実態は明らかではないが、小検見を併用した定免制と推測されている。正徳二年正月隠田畑の内詮議に始まり、従来の土免制を廃止して正徳二年田畑春法による検見取を採用、更に同四年以降は春免制採用による定免反取法が施行されたという⁽⁶⁾。その結果、正徳四年の秋物成は四四万六四〇〇俵余と、幕末に至るまでの同藩収納量の最高を記録したという。この正徳期の徴租額の高水準は一応享保四年まで続いたとされるが、現在通覧し得る享保一六年以降、慶応三年に至る一三七七年間の徴租額を揭示すると次の通りである（第6表⁽⁸⁾）。

「久留米藩旧租要略」には、該数字を「口米及大庄屋給米旧慣ニ加ヘタル俵高ナリ」と注記し、収納量を七段階に区分して年数を計上している（第7表）。徴租額最低の八万俵余は、上方以西、特に九州地方を襲った大飢饉の享保一七年であり、久留米領だけで翌秋迄の餓死人は一人余と伝えられる。同年を除けば三六〇三九万俵（一二、三万石）の年が過半（五七・七％）を占め、その前後の三〇〇三三万俵・四〇万俵余の年が各二〇年となっており、四一万俵

第6表 久留米藩 自享保16年
至慶応3年 徴租額

享保16	俵 243,755	明和 3	俵 381,121	享和 1	俵 393,687	天保 7	俵 278,177
17	83,752	4	370,416	2	364,479	8	404,221
18	373,293	5	381,472	3	378,073	9	289,600
19	352,987	6	350,189	文化 1	388,258	10	387,956
20	362,028	7	394,260	2	396,157	11	369,575
元文 1	406,371	8	348,389	3	365,030	12	362,488
2	403,711	安永 1	371,756	4	321,644	13	390,903
3	399,093	2	419,054	5	400,143	14	348,727
4	408,321	3	413,407	6	396,601	弘化 1	388,170
5	408,598	4	411,670	7	398,486	2	383,986
寛保 1	408,282	5	376,254	8	402,857	3	389,139
2	414,435	6	405,201	9	402,342	4	339,299
3	366,197	7	364,894	10	393,052	嘉永 1	390,749
延享 1	370,627	8	357,686	11	288,984	2	338,823
2	273,606	9	398,338	12	373,836	3	299,439
3	327,025	天明 1	393,507	13	349,424	4	358,488
4	365,679	2	341,284	14	388,563	5	362,609
寛延 1	364,945	3	360,314	文政 1	400,709	6	391,600
2	379,635	4	383,900	2	371,225	安政 1	373,406
3	352,400	5	391,242	3	369,918	2	404,575
宝暦 1	405,116	6	347,798	4	402,010	3	398,691
2	380,606	7	413,817	5	384,972	4	393,585
3	416,916	8	376,702	6	389,130	5	355,871
4	425,016	寛政 1	389,264	7	389,286	6	352,907
5	346,521	2	378,110	8	380,195	万延 1	360,566
6	377,271	3	341,934	9	404,650	文久 1	395,122
7	403,945	4	343,645	10	395,246	2	385,400
8	413,980	5	399,361	11	238,212	3	377,454
9	403,025	6	396,950	12	387,918	元治 1	394,644
10	381,377	7	372,000	天保 1	353,427	慶応 1	382,513
11	411,244	8	372,487	2	332,956	2	334,000
12	376,819	9	392,579	3	394,340	3	369,165
13	404,287	10	401,231	4	364,498		
明和 1	401,407	11	393,635	5	403,509		
2	379,171	12	383,635	6	383,786		

『久留米藩旧租要略』(『福岡県史資料』第6輯 p430~432)

第7表 自享保16年 徴租額
至慶応3年

徴 租 額	年数
42万俵余	1
41万俵余	8
40万俵余	20
39~36万俵	79
35~30万俵	21
29~23万俵	7
8万俵余	1
計	137

「久留米藩旧租要略」による

を超える」と豊作年、三〇万俵未満が不作年として扱えられる。

俵禄制移行後の収納高と、前の元禄期の収納高を単純比較することはできないが、このような収納をもたらしした正徳の税制改革について、永尾正剛氏は「竿入検地による出目地の創出・畝数把握とともに、立毛良き所を坪刈りし、これを総畝数に撫らすことで増石を行ない、秋物成の増徴に成功した」と増徴のテクニク・特徴を説明され、松下志朗氏も正徳改革の結果、著しい畝数増を検出され、「正徳改革による年貢増徴の志向は免率の増加を新し

(10)

い徴租方法で実現させただけでなく、外延的にも畝数を著しく増加させて成功を収め得た」とされる。
寛文期の大石堰・長野堰の構築に代表される筑後川の治水工事につづき、正徳期の床島堰の完成による水田造成の成功など、同時期の生産力の上昇は認め得るとは云うものの、正徳の税制改革が可成りの収奪の強化を伴うものであったことは諸氏の言及されるところである。享保一三年二月、夏成物増徴の目論見が、上三郡の農民の抵抗の前に撤回を余儀なくされ、農民の騒動に対しては不問に付したばかりか「百姓共至極困究之段上達不仕、依之御領中騒動候段不届之至」として、御郡方惣才判が処断されている事実は、収奪が限界を超えるものであったことを示すものと思われる。

なお、正徳四年に二五〇貫目の定額銀納となったと云われている夏物成は、総生産量の十分一と認定された大・小麦一万二千余石、菜種千六百石余を銀目換算したものとされているが、元禄期の予算書でみた通り、同時期に既に夏物成の二五〇貫目の定額銀納は定着していたように見受けられ、「米府年表」文化十一年八月九日の条に「夏成御免極、夏成の義年々豊凶に拘らず、大凡銀二五三貫目の左右につき以来不載」とみえるから、若干の異同はあるものの、

幕末までこの定額銀納は踏襲されたと思われる。

江戸期における久留米藩領の菜種生産の実態は不明であるが、明治初年において全国第三位の地位を占めるに至る同地の菜種生産について藩が積極的に生産量の把握することを放棄していることは、米納年貢増徴の強行が、裏作生産の存在なくしては実現し得ないことを、藩当局が認識していたからに他ならないと思われる。

以上みてきた通り、増徴策が限界に達しながら、しかもなお久留米藩の財政収支は好転し得ず、「米府年表」には、享保一五年の銀札発行をはじめ、簡略令、在町先納銀・才覚金の賦課、諸役人の省減、家中上米・上金令がくり返えし記録され、寛保三年大坂で御用達兵庫屋弥兵衛が御仕送りの御断りを申出たことや、宝暦四年在町人別銀賦課に対して、領中農民十余万人が蜂起のことなどを伝えている。

この宝暦四年の領民騒動は、藩が在町一統へ対し一人別一カ年銀札六匁ツ、一カ月六分ツ、毎月十五日限り差出すべきことを命じたことに端を発したものであって、三月十九日廿日頃から始まり、藩役人の説得によって四月二日夜に鎮った騒動では「標掠村吏の家を毀つ事六十三字、其行装簑笠に鎌を持、関を上て大庄屋庄屋用達之者等を打崩す⁽¹³⁾」とあり、落着後の四月大庄屋廿五人閉戸慎、惣奉行以下の担当藩役人は役義召放・閉門等の処分を受けたほか、

在方騒動の頭取・余党ら三七名が刑死、窄舎三〇〇人に及び、追放・過料銭の処罰を受けている。この騒動中に惣郡百姓中から提出された願書には、「大庄屋耕作之長に被立置候へ共、耕作御上納余分を考も不仕、剩御物成御免相極百姓中零落困究、作物之養ひも致不得、弥増実り鮮く儀眼前の儀に候」と、物成免相が大庄屋レベルで取極められていることを示し、その大庄屋は「第一我可相助役義元を失ひ、御上より被仰付候義を奉相守として却て御政道の妨に相成候義を申上、少々蒙御役義権威不及所存を相立、我意に誇り且対御奉行御機嫌を取、言葉を飾候義難申尽候」として、その罷免を願出、かつ

今般被仰付候人別上銀之義恐多申上事に候へ共、御上御勝手方被為遊御差支無余義被為被仰付候御義奉承知候、何分にも致出精御上納申上度奉存候へ共、數ヶ年相統損毛仕御檢見御願申上候ても、去る未年已來立毛不相応に過分の上納仕、又為御救御銀米被仰付候ても廉直に割賦無御座、末々迄順道不仕、大坂借用銀等も右同然、且御銀米拝借之筋其外御歎申上度奉存候ても、御上に達至極延引仕、万端差支將又御物成其外銀米共御上納仕候節、日延之義願出候ても押て取立御座候に付、無勘身上枯却仕候者多く、其外農具家財等已に売払過分之失却相立、極々及困究、只今迄之通りにては農業起取続々恐御歎申上度奉存候⁽¹⁴⁾(下略、傍点引用者)

と年貢納入の困難を訴え、つづけて後段には特に御廻米撰立上納に際して、米俵撰別の敵しさと、それに伴う諸負担の重さを嘆じているのである。

過度の免率によって定免が継続されたとする「去ル未年」が何時の年を指すのかは明らかではないが、上引の享保一六年以降の徴租額表をみると、延享二、三年の二七万俵・三二万俵と不作年のあと、寛延期が三五〇三七万俵と中の下作、宝暦元年には四〇万俵に回復し、騒動の前年宝暦三年には四一万俵、翌四年には四一万七千俵弱と、久留米藩としては上作に位する収納を記録しており、正徳四年改変の春免制採用の税法なるものが、現実の作柄の豊凶に拘わりなく、一定以上の物成収納を支える楨杆となっており、更に大庄屋の存在がその補完装置となっていたことを窺い知ることができる。⁽¹⁵⁾

注

(1) 「久留米藩旧租要略」(福岡県史資料)第六輯、四二

五頁、「久留米小史」卷八

(2) 久留米市民図書館所蔵「有馬家文庫」

(3) 「米府年表」(「久留米市誌」下編)

(4) 「米府年表」宝永七年十二月の条に「是迄地方より直に受取候処、地方より御蔵納に成、御蔵所より御家中に被相渡」とあるが、正徳元年の御勝手方凡積目録(御旧

制調書十)には支出に知行米の記載なく、布告と実施には、時間的ずれがあると思われる。

- (5) 「御旧制調書」十に、慶安元年二月二十八日「西大名衆国々物成之辻、大阪上り払分之員数を以大積目録」なる書冊から筑前黒田家・柳川藩立花家の国用見積書が抄写されているが、物成総量から必要経費を指引いた残石は総て大坂廻米することが前提とされている。

- (6) 松下志朗「久留米藩の石高制と徴租法」(福岡大学「人文論叢」第二巻四号)

- (7) 同右

- (8) 「御免極」と呼ばれる該数字は「米府年表」、「久留米小史」、「御書出之類」、「藩法集」11久留米藩等にも収録されている。いずれも原典を同じくすると思われるものの、一三七年間のうち三三年分について数字に異なるものがある。諸書のそれぞれに原典からの書写ミス、翻刻ミスの可能性もあり、いずれを善本とするか採択の基準が得られないまま、「旧租要略」の数字に拠った。

- (9) 永尾正剛「筑後菜種と大坂阿種物問屋の動向」(「西南地域史研究」第三輯、一二一頁)

- (10) 松下志朗「久留米藩の石高制と徴租法」

- (11) 「米府年表」一三八頁

- (12) 明治七年の「府県物産表」を整理分析された古島敏雄

「資本制生産の発展と地主制」によると、久留米藩領の属する三藩県の明治七年の菜種生産量は五万二五五〇石で全国第三位を占め、価格にして一八万六三〇八円は同県総生産価格の四・八%となっている。なお江戸期において筑後菜種は大坂において可成りの比重を占めているが、明治七年の三藩県の種子油の生産量は一万二〇九八石九九となっており、原料に対する搾油率二〇%とすれば、一万〇五一〇石 (59,510石) の数量が得られるから、明治初年の段階では菜種子原料がすべて県内に於て油生産に消費されている計算となり、菜種移出県とは認められない。

- (13) 「米府年表」一七一頁

- (14) 同右、一七二〜一七三頁

- (15) その一方で農村の疲弊は領内人口に現われている「米府年表」には公儀届高の領内人口の所載があるが、安永九年には公儀届高の他に実数が記録され、明和五年より二万七二一人の減となっている。

久留米藩領内人口

	人
元禄10	137,143
寛延3	180,889
宝暦6	180,921
明和5	181,461
安永9	181,951
(実は)	154,830

二 後期の財政収支

限界に達したと思われる収奪の実施にも拘わらず慢性化した財用不足の原因は、中央市場における米価の低落・領主の消費生活の膨張等々、諸藩にとって共通の事由のほか、個別藩にとって検討を要することではあるか、当面、ここでは専ら文化十一年堂島における空米事件発生に至るまでの後期の財政収支の面に眼を向けよう。「御旧制調書」にみえる寛延四年の「惣積」は作成月日が不明であるが、御蔵納三九万八千俵を予定し、七万三、二五〇俵の不足が計上されている。支出の細目を省略して費消地別に整理すると第8表の通りである。

全体の五三・五%を占める国許入用の大半は、家中渡しの俸禄・扶持・配当米等であって、部局の省減が進行していた当時、元禄時よりは給知高の減少が推測されるものの、頻繁に行なわれた上知・借上ヶ等の実施状況の詳細が把握されないの、該予算の数字を鵜呑みにすることはできない。大雑把に云って、江戸から遠隔地の西国大名にとって、参覲交代が財政圧迫の主要因であったことは確かのようにある。なお、史料の上で支出銀高を米高に換算しているB欄の数値の合計は九万九千俵余であるが、参覲入用が米高で予算化されているように、蔵米の換貨量や換貨地などの説明はみられない。また不足米七万三千余俵とあるが、該見積書には、当然存在する管の借銀返済充当米の計上がないことから、実際の不足額は更に増嵩す

第8表 寛延4年惣積（「御旧制調書」）

	A	B	A+B	配分比
国許入用	167,292 ^俵	84,940 ^俵	252,232 ^俵	53.5%
上方入用	4,700	300	5,000	1.1
江戸入用	49,818	14,200	64,018	13.6
参覲入用	150,000		150,000	31.8
計	371,810	99,440	471,250	100.0
収納米	398,000 ^俵		-73,250 ^俵 不足	

注 A欄は米建、B欄は銀高を1俵17匁で換算表示

ることが察知される。

以上みてきた通り、予算書という限界はあるが、赤字財政が常態の久留米藩では寛政三年に大坂の堂島において米切手の発行による八万五千俵余の蔵出延滞事件を起している。この事件に関する検討は後段に譲り、この事件を契機として作成されたと思われる寛政六年の予算書の内容を紹介しておこう。

天明二、三、六年の凶作年も三四〜三六万俵の収納に持ち込んだ久留米藩は、諸国凶作の年と云われる天明七年は四一万俵の高収納をあげているが、寛政二年九月御勝手方差支のため、家中並無格末々に至るまで増上米を命じ、翌三年一二月再び御勝手方差支えが仰出され、四年正月洪水のための公儀への損毛届高は表高二万石のうち一萬一千石余となっており、在方高役銀の徴集が始まっている。同年大坂廻米量を定格一三万俵とし、二年後の寛政六年に至って収納高の多寡に応じた支出のモデル・プランが作成されたわけである。

すなわち、御蔵納三五万〜三六万五千俵、同三六万五千〜三八万五千俵、三八万五千〜四〇万俵、四〇万俵以上の四段階に分け、支出費目の額を按分したものである（第9表）。

この予算案で特徴的なことは、米方収支（第9表Ⅰ）と銀方収支（第9表Ⅱ）に分けられているが、銀方収支に関しては、蔵納高の多寡に拘わらず一通りの試算しか作成されていないことである。換言すれば、米方収入の多寡が貨幣収入の多寡に結果しないこと、すなわち販売米の量は不変であることを意味するように思われる。

先ず、米方支出（第9表Ⅰ）についてみると、収納米高の多寡に拘わらず「定格渡し」とされているのは、別表Aに示す通りである。先に触れた通り大坂廻米が定格の一三万俵とされ、非米作地帯の代銀納部分が大豆を含めて一萬四、七五〇石分が収納から控除されている。また江戸藩邸詰の家人に対する特別手当と参覲費用が定格とされ、大坂の掛屋米屋平右衛門知行米と大庄屋給米も、収納米の多寡に拘わりなく確保されている。廻米と区別された御払米一

第9表Ⅰ 寛政6年御勝手方積
「御旧制調書十一」(有馬家文庫)

米 方

収納米高	定格御渡方 ① 俵	家中渡 ② 俵	計	差引過不足
御蔵納35万～ 36万5千俵の 年	237,610 (65.6%)	124,880 (34.4%)	362,480 (100%)	御蔵納 35万俵＝ノ 12,400俵不足 36万俵＝ノ 2,700俵余分
同36万5千俵 ～38万5千俵 の年	237,610 (62.9%)	140,034 (37.1%)	377,640 (100%)	36万5千俵＝ノ 12,500俵不足 37万俵＝ノ 7,600俵不足 38万俵＝ノ 2,360俵余計 38万5千俵＝ノ 7,300俵余計
同38万5千俵 以上の年	237,610 (60.7%)	153,834 (39.3%)	391,500 (100%)	38万5千俵＝ノ 6,400俵不足
同40万俵以上 の年	237,610 (58.5%)	168,150 (41.5%)	405,860 (100%)	40万俵＝ノ 5,800俵不足

注 ① 定格御渡方の内訳は別表 A ② 家中渡の内訳は別表 B

別表 A

寛政6年御勝手方御積の内米方定式御渡方内訳

御廻米高	130,000 俵	小払12ヵ月分	3,260 俵
江戸御扶持方足米	6,000	御 囲 米	4,000
御旅用御手当	22,000	山中其外銀納分代銀御銀払ニ立置	8,500
江戸上方御配当	43,600	大豆銀納分同断	6,250
大庄屋給米	1,900	御払米同断	10,000
大坂米屋平右衛門知行米	2,100	計	237,610

別表 B

家中渡の内訳	御蔵納35万 ～36万5千 俵	同36万5千 俵～38万5 千俵	同38万5千 俵以上	同40万俵以 上
知行方渡高	58,939 俵	67,080 俵	150,834 俵	164,000 俵
御配当方渡高	26,684	30,000		
御扶持方御渡高	29,153	32,654		
寺社方御渡高	3,253	3,500		
御先手配当渡高	4,743	5,300		
旅役知行配当増高	2,110			
江戸上方定居日勤歩増		1,500	3,000	4,150
計	124,880	140,034	153,834	168,150

第9表 II 寛政6年御勝手方御積

銀 方

収 入	夏物成上納銀	250,000	目
	山中銀納 8,500 俵	221,000 ①	
	大豆銀納 6,230 俵代	150,000	
	御払米 10,000 俵代	621,000	
支 出	計	621,000	
	12ヵ月小払	360,000 ②	
	差 上 金	31,200	
	拝借返上銀	30,000	
	各仕舞諸方利払	80,000	
	二八月造用夫銀	16,000	
	御役料衣類金銀類	52,800	
	日 田 年 賦	10,000	
	公 米 入 用	20,000	
	御 給 銀	15,000	
	計	615,000	
差 引 余 銀		6,000	
当時御借入銀高		1,385,000 ③	
此利凡		200,000	
元一割年々払		138,500 ④	
計 (毎年仕解分)		338,500	
代米 20,000 俵 在納可相償可申)			

注 ① 1 俵 = 付 15 匁宛
 ② 1 ヵ月 30 匁宛
 ③ 借銀内訳
 大坂 400 匁目
 下関 500 匁目
 橋本 360 匁目
 長崎 80 匁目
 田代 40 匁目
 ④ 但御蔵納35万俵の年は
 「元入断可申事」とあり

万俵は在地払いを意味するものか、銀方収入の中に、山中石代納値段と同価格で換算計上されている。結局収納高の多寡による財政収支の帳尻合わせは、専ら家中渡しの操作によって行なわれていることを知ることができ。しかも財用不足の家臣団への鑑寄せが、ほぼ限界に達していたであろうことは、最低の収納年と最高の収納年の場合とでは、家中渡し高に四万三千俵余の開きがあるが、最高の収納年の場合でも、全収納量の四一・五%の支給すれば、五、八〇〇俵の不足を来すという計算例が、よくそれを示している。

次に銀方収支についてみると、収入は定額上納の夏成銀のほか、米方収納から控除されている石代銀納分と御払米一万俵分が計上されているが、大坂廻米一三万俵の販売分が収入に予定されていないことが不審でもあり、注目に価する。大坂廻米の全額が上方借銀の

返済に充当されるという推測もあり得ると思うが、該銀方支出の費目には借銀返済は見当らず、結果は差引銀六貫目の余銀とある。そして借銀については別途に当時御借入銀高一、三八五貫目で、その内訳は注③に示した通り五カ所で、下関における五〇〇貫目が最高で、大坂は四〇〇貫目で二位につけている。この返済には利払二〇〇貫目、元入一割の年賦銀計三三八貫五〇〇目を要し、在方から代米二万俵（一俵一五匁として銀三〇〇貫目）の納入が予定されておおり、収納が最低の三五万俵の年は元入分はお断りとなっている。

いずれにしても、この寛政六年の収納高別の予算案は、その後数年間の規範となったと見做され、寛政一二年の予算では物成高凡三八万八千俵余に対し、家中渡しは一五万俵を計上しているが、定格御廻米一三万俵に関する販売代銀収入が寛政六年の予算案同様に計上されていないことは、検討を要する問題であり、この点を念頭に、以下久留米藩の大坂における蔵米販売の在り方について検討を加えてみたい。

三 蔵出延滞事件で具現された筑後蔵の内情

まず、久留米藩が寛政四年上方廻米量を定格一三万俵とする契機となったと思われる寛政三年に起った大坂堂島における蔵出米延滞事件に照準を当ててみたい。

この「寛政の筑後蔵一件」については、嘗て黒羽兵治郎氏が堂島の米方年行司を勤めた播磨屋室谷家に伝わる「筑後蔵一件」なる記録によって詳細な紹介がされている。⁽¹⁾以下事件の経過は同書に拠っている。

事件の発端は寛政三年六月二日、堂島の米仲買五四名が筑後蔵の蔵元・名代・掛屋を相手取り、去年戌年米八万五、八三〇俵の蔵出不履行を町奉行所に出訴したのに始まる。米仲買が出訴に踏み切る以前にも、筑後米の蔵出請求が再三に亘って交渉されたであろうことは想像されるところであって、公儀権力をバックに早急な解決を要求する仲

買ら原告に対して、地方役人は穏便な解決を勧奨し、それを受けて同月末に原告・被告双方連署の訴訟取下ケ願が提出され、内済すべきこととなった。しかし蔵屋敷側の提示する内済条件について仲買側と容易に折合いがつかず、再三の日延べを繰り返えたのち、業を煮した町奉行の恫喝のもとに、七月九日急拗決着をみたのであった。その示談条件は次の通り町奉行所へ届出られている。

乍恐書附を以奉申上候

米仲買人之内

五拾四人

一筑後米蔵出し滞出入ニ付、先月廿一日蔵元・名代・掛屋相手取奉願上候所、早速右三人之者被為召出被仰渡候ニ付、対談仕度趣ニ付、一昨七日迄日延之儀、右三人私共俱々奉願上候処、御聞済被成下難有奉存、段々懸合仕候処、左之通

一滞米俵高八万五千八百卅俵

内貳千三百七拾俵

右は被仰渡候持冊米之分、何時ニ而も切手差廻次第可相渡旨、相手三人之者も奉申上候

残八万三千四百六拾俵

内貳万九千二百貳拾俵

右之米昨八日ニ請取申候

三万俵

右之米今九日ニ請取申候

残貳万四千貳百四拾俵

右は本米御払之内損米ニ相成候分、別段之御払ニ相成候ニ付、代り米御国許御積取、近々之内着岸可致旨、其節精米撰立御渡可被成旨、御屋鋪より被仰聞候間、何分暫之所ニ候間相待具候様、右三人を以被仰聞候ニ付、私共儀も無抛御儀奉存候ニ付、右之段承知仕、御米到着迄相待可申旨、対談相整申候
右之通御威光を以追々米請取、相残り候俵数も請取方対談相済申候ニ付、乍恐濟口書付を以御断申上候、此段御開済被成下候ハ、御慈悲難有奉存候、以上

寛政三年

米仲買之内

五拾三人印

亥七月九日

(中略)

右之通濟口相違無御座候ニ付、私共連印仕、御断申上候、此段御開届被為成下候ハ、難有奉存候、以上

〔蔵元・掛屋・名代連署、略〕⁽²⁾

西御奉行様

上

上引の届書でみる限り、蔵出滞り米八万五八三〇俵のうち、六万一、五九〇俵分は内済届書提出の七月九日の時点で蔵出しが完了したかのように見受けられ、未済分の二万四、二四〇俵分についてのみ、大坂蔵屋敷在庫中に損米となったため、改めて国許から上坂の上引渡すという蔵屋敷の提案を、米仲買が納得したことによって示談が成立したことになる。

しかし、これは幕府の過米切手制禁を建て前とする表向きの条件であって、現実には採られた解決策は次表に示すようなものであった。

蔵屋敷が当面蔵出しに応じられる米俵は、請求総額の僅か二・七六%の二、三七〇俵のみであり、しかもこの分に

つては内済届書に「持廻米」とあるから、同年二月一七日の大坂町触にみえる米価引立策として実施した持廻米の調査によって町奉行所に登録された切手米高、いわば在庫否定が不可能な俵数とみることができ。示談成立直前に蔵出しを約束した二万九、二二〇俵(三四%)は一俵二一匁替で米切手の買戻し、すなわち、その時点で蔵屋敷の過米切手買戻し資金の調達は六一三貫目余を限度としたこと、残る五万四、二四〇俵については、三万俵分六三〇貫目を両替商の手形によって決済、二万四、二四〇俵は俵庄・柴庄兩名の保証の下に、在庫中の損耗米とし、代米を国許から廻送り直すことで事件の決着がつけられたのである。

度々指摘するように、この事件の翌年、寛政四年に上方為登米を定格一三万俵とした藩側の意図は伝わらない。従前の量より増加したのか減少したのか判断の根拠はないが、前年の轍を踏むことを回避するための措置とすれば、蔵納米の多寡に拘わらず、最少一三万俵は、大坂へ上米の必要があると認定した結果と思われる。とすれば、前々年寛政二年の大坂廻米量は一三万俵を割っていたであろうことが想像され、表面化しただけでも八万五千俵余

寛政3年7月 蔵出延滞示談条件

- 85,830俵……筑後蔵蔵出し延滞高
- 内 (1) 2,370俵……切手廻り次第蔵出し
- (2) 29,220俵……7月6日迄に蔵出し (実は1俵21匁の買戻し)
 @21匁×29,220俵=613,620目)
- (3) 30,000俵……1俵21匁替で蔵元名代掛屋が買戻しの体裁にして
 @21匁×30,000俵=630,000目を 両替商の手形で決済、その内訳は下記の通り
- | | |
|----------|------------|
| 150,000目 | 米屋喜兵衛預手形 |
| 150,000目 | " |
| 50,000目 | 天王寺屋伊右衛門手形 |
| 80,000目 | " |
| 100,000目 | 泉屋卯平手形 |
| 100,000目 | " 預手形 |
- (4) 24,240俵……俵庄・柴庄兩名の買受け分とし、但し、在庫損米として、代り米を国許より廻送次第受取る予定

の蔵出延滞を起した事實は、少く見積つても、現実の廻米量の七割増の過米切手の発行が行なわれていたと推測して大過はなからうと思われる。

このような規模の過米切手の発行が、久留米藩にとって常態であつたのか、御勝手不如意の亢じた寛政初年の特殊事例であつたかは確かめ得ないが、二〇年後の文化十一年には筑後米四二万石（一二六万俵）という莫大な過米切手が發覺している。『堂島米市場史』の著者をして「空前絶後」と形容させるほどのこの空米切手事件について、同時代諸藩の大坂蔵屋舗の内情に精通していた草間伊助は次のように解説している。⁽³⁾

扱又当三月頃騒動仕候ハ、筑後馬場御蔵米出切手の儀ニ御座候、凡其荒増ヲ尋候ニ、式卅年以来御勝手向不如意之上、公私之費用相嵩み、莫大之御借財ニ有之、必支ト御難決ニ付、六七ヶ年已前ハ敝御儉約被立、御取しらベニて、借財之分、当用年賦等に到る迄、御断被仰出、京伏見屋敷も在役人四拾人斗減シラレ、留主居大坂ハ掛ケ持ニて、万端敝御仕法御改メ被成候得共、公務用御用始メ臨時物入多キ上、打統キ米価下落ニて、御仕送り始メ年中之御差引キも難出来、御仕法年限中故、館入始メ市中ハ之借財一錢シも難出来、依之年分之用銀差操も一切出来不申ニ付、国方出入町人之内、当地住居鉄屋庄助池田屋伊兵衛[]と申者ハ種々と内談取極メ、蔵米出切手を以、借財之引キ当として、大坂浜方井市中之ものハ他借被成候、此出切手の儀ハ正米ニ有之故、公辺向キにも外蔵同様敝御取扱之義ハ、人々能ク存シ居候義故儘ニ存、市町之もの共皆々右出切手を以出銀仕候、尤此義ハ外向キも可有之哉、しかとハ不存候ヘども、内々承り候処、多年其振合を以、金銀融通被成候趣、依之近来米価下直ニ付ては、作廻難被成ニ付、無拠此四五年ハ夥敷出切手ヲ以借財有之趣、尤空米之儀故、公辺ニ相成リ申候てハ、殿様之首尾も相抱り申事故、随分兼てハ其備エハ御心得被成候得共、兎角御作廻難出来、年々之差引も難被成、無拠差引之節も、右出切手を以御差引被成候様ニ相成候故、市中銀主共も何とやら空

米之所気味悪敷、疑迷之もの共も有之候得共、何分元利借財正銀御渡シ被成候儀無之故、迷惑ニ及ヒ、市中御用金にて金銀融通不宜候ニ付、弥空米之疑惑と正銀之不融通ニ困リ申候ニ付、其段銀主共相歎キ申候所、屋敷ハ決而空米之義にハ無之、出切手相渡置候上ハ、自然銀主入用銀之節ハ、浜方にて売払立用可致候、借財限月返済之砌ハ、又出切手持参いたし差引可致候、番附日付キ之違ハ不苦候、何分相渡し置候出切手之辻、持参有之候ハ、宜敷被仰候故、銀主之もの共之内ハ、無抛銀子入用之ものハ浜にて売払、暫立用仕候と申振合にて、近來其相對を以借財有之分、又広太成銀高ニ御座候よし、右相對切手も本切手も、皆同様の切手に有之候故、右銀主無抛売払申候切手ヲ、又浜方買入、是を以両替方へ入替ニ差入、又ハ此内御買米之公用ニ相成り居候切手も有之、種々ト入組有之候得共、何分屋敷之出切手ニ相違無之、又空米之所、相對にて請取候切手ハ格別、浜方ニ而相調候切手ハ急度正米ニ御座候故、其切手を以藏出しに向ひ候時、買手ハ其通成レ共、前文之通、切手正不正混雜いたし有之、出米ニむかひ候切手も、やはり相對にて銀主へ渡し置候切手にて、渡し方すみやかに無之、其上旧冬ハ諸屋敷四步登せ之滅石故、正不正之出切手一チ時ニ藏出しに向ひ候時ハ難渋眼前之事故、彼是申立、藏出し相滞候ハ大モメと相成り、甚浜方騒動ニ及ヒ、ツヒニ市町之ものども公迎へ願出申候、此高凡七万石余、其外公儀へ御買米ニ相成り居候切手と、両替方へ入替ニ相成居候切手、又市中素人之ものへ引キ当テに取置候切手と、凡都合高四拾貳万石之切手米之由、誠ニ不怪不正之儀にて（下略）

やや長文の引用となったが、要するに久留米藩では天明頃から勝手向不如意にて借財が嵩み、六、七年以前から儉約令を施行、京・伏見詰の役人も減員して大坂役人の兼帯とするなど嚴重な仕法を実施してきたが、公務御用・臨時物入などに加えて、米価の低落で財政は悪化の一方であった。しかも御仕法年限中ということで、従前の借銀の返済も凍結しているため、館入を始め大坂市中からの借入が不可能となった。そこで国元の出入商人のうち、大坂に本店

をもつ鉄屋庄助等と内密に相談して出切手を担保とする借入を行なった。財政悪化を熟知して出銀を拒んでいた銀主たちも、官銀入替令などによって幕府が保証する出切手が引当ならば正銀同様と信用して出銀に応じたところ、米価の低落によってますます指操りに窮した筑後蔵では、元利の返済にも、更に出切手を発行することによって糊塗したから、実米の裏付けのない出切手が大量となり、空米の疑惑が市中に拡まった。不安になった銀主たちが蔵屋舗に糺したところ、蔵屋舗では正当な出切手であると言明し、必要ならば浜方で出切手を売払って一時の立用を図ることを認めたので、銀主たちは、借銀の担保として受取った相對切手を浜方へ売払ったりしたので、本来の出切手と入り混って市中に流通し、それらを買取って入替に入れるもの、御買米令に応ずる者等があり、また相對切手と本来の出切手の区別なく蔵出し請求が行なわれたから、たゞでさえ在庫米不足の上、当時幕令によって四歩減廻米が強制されていたさ中、忽ち蔵出しに支障を来し、大混乱となった模様を伝えたものである。

享保年中ごろから始まったと思われる堂島の先納切手は通常、空米 \parallel 過米切手と短絡的に同一視されがちである。もっとも当初の未着米前売りに際して出切手が発行されていたか否か確認し得ないが、借銀担保に発行される先納切手は、一見して、出切手と類別し得る坊主切手が大半を占め、それは市場に流通性のない約束手形であった。すなわち蔵屋舗で払米が公示され、入札の上落札者に発行される出切手には、看札に掲げられた払米總数と、落札の日付・落札人の名前が明記され、押切割印や数種の印判が捺されてあるが、坊主切手にはそれらが一切ないのである（本稿末尾掲載の写真版参照）。因みに入替阿替を主業とした加嶋屋長田家には歴大な坊主切手が残存し、坊主切手による諸藩蔵屋舗の借銀が盛行し、而も返済不履行の多かったことを示している。宝暦一年以降、空米切手の禁止を強調した幕府法令は、先納切手の発行を禁止するものではなかった。すなわち安永九年五月二七日の大坂町触に「向後借銀之引当に差入候分は調達切手之名目を以、払米出切手と相分候様認、銀主へ為相渡候」との趣旨からすれば、出切

手と識別し得る坊主切手―先納切手は合法的な存在であった。しかもなお、久留米藩を例外とせず、金策に窮した諸蔵によって、非合法の出切手担保の借入が横行していたことは、島本得一氏の解説によれば、出切手が無利足の資金調達を可能にしたと、その効用が指摘されている。⁽⁴⁾

なお、草間伊助が言及している久留米藩の六、七年以前から実施されたという嚴重の御仕法とは、文化六年の「已年御改法」と呼ばれるものであって、同年九月廿四日

御勝手方連々差支、莫大之御他借相重り不輕儀ニ至り候間、江戸・御国・大坂とも御借財筋御返下被差延、以後御借増無之御取統之御積不被相立候ては難相済、今般御改法被仰出、⁽⁵⁾（傍点引用者）

との発令は、人員削減を伴う諸経費の節減を骨子とするが、極限に達した借財の増嵩を抑止しようとしたことが、空米切手の濫発に連らなつたのとするのは、穿ち過ぎであらうか。

ともあれ、定格廻米高一三万俵の十倍に垂んとする過米切手の発行で、取付け騒わぎを惹き起すに至った筑後蔵の内情についての草間伊助の観測が、どのように裏付けられるか、事件の帳本人と目されている久留米藩の出入商人手津屋（鉄屋）正助の行動を追ってみることにする。

注

平野町式丁目米屋平右衛門とある。

(1) 黒羽兵治郎「筑後蔵の出来延滞事件」(「近世の大阪」

第四章)

(3) 「草間伊助筆記」(「大阪市史」第五卷、九五七―九五九頁)

(2) 同右、八八―八九頁、同書の引用には蔵元ら蔵屋敷側被告の名前が省略されているが、伊奈健次「林田正助詳

(4) 島本得一「堂島米会所文献集」所収「古今八木相場帳・八木相場帳追考」の解題。

伝」(三二頁)に、寛政三年の筑後蔵の蔵元は平野町二丁目泉屋新右衛門、名代過書町天王寺屋右兵衛、掛屋内

(5) 「御書出之類」十八「藩法集」11、久留米藩「一一〇六頁」

四 筑後蔵における手津屋の役割

文化年間、久留米藩の出入商人として、大坂における蔵米販売に特別の役割を担った手津屋（林田姓）正助に関しては、昭和十年代の初め頃、伊奈健次氏による『林田正助詳伝』⁽¹⁾及び「手津屋の成立と大坂堂島における米穀取引」に詳述され、近年には林田家文書を駆使された永尾正剛氏の論考がある。⁽³⁾両氏の紹介されたところによれば、手津屋正助は久留米の東方五里、筑後川中流に位置し、有明海への舟運の便をもち、長崎街道・日田街道を扼する田主丸町（筑後竹野郡）を本拠とする。安永年間長崎の手津屋（井手姓）に奉公するが、一年半後兄の死去によって帰郷し、その際主家の暖簾分けを受けて、手津屋を屋号としたという。同人は宝暦一三年生れというから長崎での手代奉公は二〇才前後に該当する。それ以前郷里において幼年時代から兄を助け、農業の傍ら小倉・博多・長崎・日田等へ油の行商に従事したことが、正助自身が執筆した子孫への教諭書の中に見える。兄助四郎代に逼塞していたという林田家の農地の保有状況、商業活動の規模・内容などは詳かでないが、正助の代に急速にその経営を伸張させたらしい。⁽⁴⁾幼年時代の近隣都市への油の行商から、後年「先祖代より大坂表へ菜種子米雜穀登せ候事、代々仕米の商売に御座候」と云わしめる営業の拡張の経過は、伊奈健次氏の田主丸本店の営業内容として、⁽⁵⁾①小商品売買、②農村への貸付、③米・大豆・種子等取立、④同上大坂への廻送、⑤藩府への献金及び調達金との整理に説明される。農民への前貸による菜種子・雜穀等の集荷と上方への廻送販売、その返り荷として上方及び長崎での仕入商品の国許周辺への販売という図式が推察されるのである。手津屋の廻船業については、寛政一〇年田主丸本店が類火に逢ったため、当時大坂において大銀を投じて購入したばかりの新造船を手離さなくてはならなくなった際、藩の補助金を得て廻船業を継続し得たといわれ、尔来正助の持船を「御手船」と称している。⁽⁶⁾同時期以前、手津屋の上方商売において、手船・借船

の依存度は不明であるが、文化十年八月の手津屋上書に、寛政九年頃、藩から領内菜種の買付と大坂廻送を命じられ、大坂問屋から前銀二〇〇貫目、藩から銀一〇〇貫目の出銀をうけたこと、享和三年からは「御主法菜種」と称し、上三郡の六名が仲間を結成し、翌文化元年以降は手津正が単独で冥加銀の納入を伴う筑後菜種の集荷と大坂における販売に従事していたことに言及しており、また永尾氏によれば、寛政一〇年から蔵米の輸送を請負っていたとされているから、手船の所持に藩の援助があったことの背景を窺わせる。それは寛延―宝暦期に実施された城下御用商人グループによる国産菜種の流通独占販売が、城下商人の衰退によって挫折し、中断ののち手津正らが町商人に委ねられたことを示すものであった。⁽⁹⁾

如上の経緯を経て、手津正が大坂における蔵米販売にタッチするようになったのは、文化二年二月、「御勝手方御用聞」を拝命した以後のことに属すると思われる。

この「御主法菜種」の請負業務につづく筑後蔵米の取扱いについて、当初藩と手津屋との間で、どのような取極めがあったのかは詳かでないが、文化九年五月六日付の手津正の願書の一節に次のように述べられている。⁽¹⁰⁾

一 先年、私不精も為冥加、大坂ニ而聊宛ニ而も御米買持并御買戻之節も出精相働キ申上候様被仰聞、奉畏相成丈ハ出精致居候所、卯・辰年ニかけ吉文字屋久米蔵御大切之御切手ヲ大鹿略仕、其後唐津屋五兵衛圀大鹿略仕候節ニも百五匁位イ迄も御買戻し相成候節ニ、大数之御失費御立被遊候段、甚歎ケ敷奉存上候ニ付、乍不相叶色々存付申候義相認メ申上、其後鈴木様御休足、翌年馬場様下ノ関網七買持一件不都合ニ付、御出勤被遊候御年ニも御買戻し候てハ御不慮ニ御失費御立被遊候御義ニ付、私不精も相成丈買持候而出精仕候様被仰聞候得共、其砌何分御屋鋪御米斗ニ而は両替方江取不申、余蔵物抱合不申候而ハ、一向両替方え承知不仕候段御達申上候所、然は無抛少々之抱合米仕、いヶ様ニも出精仕候様ニ被仰聞、奉畏夫色々工夫も仕見、^(文化五)辰年ニ至リ木村様御国元え暫

ク御休足旁御下向被遊候御義ニ付、存付候義ヲ極々御内々々速水様御取次ヲ以頭書ヲ相認メ差上候所、木村様も誠ニ御上御大切ニ御思召被遊、御国元ニ而御用席様方江色々御相談被遊被下、私義ニ御米五万石高買持ニ仕、惣ノ四藏物類五万石抱合米ニ、双方拾万石高鋪銀千貫目御入用分ハ御上色々御世話被遊被下、私手前も相成丈才覚調達申上候様ニ被為仰聞

冗漫な引用となつてしまつたが、藩が期待した手津屋の役割の概貌を窺ひ知ることができる。すなわち手津屋が拝命した「御勝手方御用聞」の内容は、御米（筑後藏米）の買持と買戻し、具体的に云い換えれば、過米切手の買持と買戻にあつたと思われる。文化四、五年の吉文字屋久米藏・唐津屋五兵衛の「大切之御切手を大鹿略」とは、その内容が明瞭ではないが、憶測すれば手津屋登用以前、兩名が同様の役割を演じていたとも受取られ、翌六年には下ノ関網七なる者の買持の失敗が手津屋の本格的な登場となつたとみられる。この過米切手の買持は国許の藩重役の諒解の上で行なわれた。文化五年の引請高は筑後米五万石と四藏物五万石の計一〇万石で、その買持に必要な鋪銀千貫目は藩が面倒をみるが、資金が不足する時は手津屋が精々才覚する含みを持つてゐる。

注 堂島において入替両替を介在させて行なう正米取引に於て必要な敷銀・歩銀については「声政秘録」に次のように説明されている。

払米落札相成り候へども代銀調達出来難きときは米方両替屋に右落札の米切手を引当にて差入れ、限月を定め銀子借受候振合にて、右両替屋を入替両替と唱へ候由、右限月までのうち米直段引上げ候節は外方へ右切手売払い、間銀を徳用致候儀も有之、又は相場下落の節は米切手そのまゝ入替両替屋へ渡し渡し候儀も有之、然る時は両替屋より米仲買の内へ申し談じ、右切手を売出し貰ひ候上、代銀を以つて貸銀元利差引勘定致し候て、不足銀最初引当て取引致候米仲買より相済ませ候由の事、

但、本文両替屋歩銀の儀は十月新米建替りの時節に銀子借入候ハ、十月より翌年の二月迄借切りの相對を以て四ヶ月分利足通例元銀一〇貫匁につき三五〇匁、又十一月十二月の内に借り入れ候ハ、月數少く候故、利足も右の割合を以て相減

じ、正月より以後に借入候分は日歩の相對に有之由の事（島本得一「堂島米会所文獻集」所収）

切手を質に入れる時の鋪銀は一〇貫目につき三五〇目で五カ月分とされているから月七朱の割合となるが、この鋪銀の基準は米相場の高下、安定度などから浮動するもので、「難波の春」では百石に付五〇〇目から三〇〇目、「正空買聞書」は百石に付五〇〇目としている（同上書）

なお他藏物の買持Ⅱ抱合米は、買持の米切手を入替兩替に差入れる時、筑後米切手だけでは兩替が危険視して融資に応じてくれないので、信用度の高い四藏物の切手を買持ち、抱合わせて入替融資を受けるというもので、藩は当面入替鋪銀のみを負担し、手津正はこの鋪銀で買持切手を担保とした資金で米相場を行ない、その利得が過米切手の買持・買戻し資金を潤沢になることを期待したと見做されるのである。また追出し期限の迫った過米切手の買戻しは、それが發覺して暴騰しないよう、市価なみに買取る手腕が要請されたのである。

ところで、文化五年の手津正の筑後米買持の規模が五万石という数字は、寛政四年以来の定格一二万俵（約四万三、三〇〇石）を上廻っており、手津正の買持が過米切手を対象とするものと想定する根拠である。同時期に久留米藩が如何程の過米切手を發行していたかは確められないが、堂島では当時から筑後藏に対して空米切手の疑惑が払まっていたことは、上引の草間伊助が指摘するところであり、入替兩替が四藏物の抱合わせなしには筑後米切手担保の融資に応じない所以であった。従って手津正の藩命による買持の意味は、大量の空米切手が市中に流出することによる筑後藏の信用失墜と相場低落の防止、相場安の時買持ち、値上りの好機を把えての売却、安値時の買戻しといった幾通りもの効果を狙ったものと常識的に考えられるが、むしろ手津正買持の真相は、想像の域を出ないが、藩が看札売りの外の贋造の出切手を直接手津正に受持たせ、買持資金を要せずして入替兩替から過米切手操作の資金を引出す手段としたのではないかとの解釈である。それは買持の規模が例年の看札売りの規模（四万三千石余）を超えていること、

第10表

辰冬(文化5)買持并御買戻惣高55,800石の抱合米、右高及下落、御失費=相成ひ高明細

目	
① 105,000	卯年上り御切手を以、辰冬7,500石入替申上ひ抱合米直段失却分
② 79,200	辰年御米11,000石買持の抱合入用直段及下落い分
③ 220,800	辰年御米24,000石御買戻抱合米下落に及ひ分
④ 110,400	辰年御米30,000石御買戻、巳秋豊年に付、追々大下落、追鋪行届不被遊い=付無抛御米6,000石、抱合米6,000石 \times 12,000石、御売払被仰付、直段不足高
⑤ 20,750	別米3,300石御買戻抱合米直合不足分、但此分御調の上3,300石御買戻の内800石無抛売払被仰付い分引、相残2,500石の御勘定故、18,400目と御扣有之い得共有様の不足高
⑥ 17,860	卯年古米7,500石抱合米に日合辰11月 δ 巳2月迄320目替引直歩
⑦ 22,910.40	右同断巳3月 δ 10月迄日合月5朱
⑧ 25,168.00	辰年御米11,000石買持、抱合米日合辰11月 δ 巳2月迄引直歩320目替
⑨ 32,467.70	辰年御米巳3月 δ 10月迄月5朱利足
⑩ 70,560.00	辰年御米72,000俵、巳3月御買戻、抱合米巳3月 δ 10月迄月5朱利、尤前220貫800目12,000俵代銀の直段御不足斗書出、日合書出不申=付
705,116.10	辰年御米55,800石高之抱合米=而右銀高失却=相成ひ管

伊奈健次「手津屋の成立と大阪島島における米穀取引」p 61~62

落が五万石という大量の買持に対して鋪銀の提供のみを行なったということからの推測である。

上に示す第10表は、この文化五年の手津屋の買持・買戻の結果を報告したものである。「草間伊助筆記」によると、大坂では文化三年の御買米令のあと、同四年六月摂河大洪水のため肥後・筑前米は六八〇九匁から七〇目余、同五年は奥・北・美濃・近江の大洪水で七七〇八匁から八〇目余、翌六年から七年にかけて米価下落とあるから、手津屋の行なった文化五年冬の買持は最悪の条件時に当たっている。総額で七〇五貫余の失費となった内訳を大雑把にみると、買持(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩A)買戻し(③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩B)のための抱合米の直段下落のための損銀に、入替両替への追鋪・歩銀が追加されている。買戻し分に抱合米が必要な理由が解せないが、買戻し分を更に入替えて融資を受けたものとも考えられる。⑤のように買戻し分の一部を売払っているケースがあるのを見れば、買戻しは必ずしも追出し期限が迫ったものだけではなく、市場での過米切

手量の調節も手津屋の請負業務の一部であつたと思われる。結局買持(A)のための諸損銀の合計は二八二貫六〇六匁一分、買戻し(B)に四二二貫五一〇匁の損銀が計上されている。

如上の数字は、藩役人が「御立会御調被成下候上、御承知被成下候分」と断つてあるが、藩が弁済に応じた額は五三五貫目で、残額一七〇貫目余は手津屋の「御奉公」となっている。⁽¹¹⁾

このような抱合米の値下りに伴つて生じた欠損の報告が、前に指摘した手津正の筑後米切手買持についての推測を、或る程度補強してくれると思うのであるが、藩の期待に應え得なかつた手津正は、当時強気の構えで、

正助買持一件之義、浜方にて御買戻ニ相成候は余程御益筋ニ相成候上、御外聞ニも不拘御為御宜有之候処、若引下ヶ候年ニも抱合米ニ而損相立候義ニこまり入候と被仰聞候ニ付、私に申上候義は御尤至極ニ奉存上候得共、私買持高、浜方にて御買戻被遊候節は、譬五六拾目之相庭之時も百目も百貳拾目ニも先年之様ニ御買戻相成候節は、老石ニ付五拾目御足銀ニノ五万石ニ而は貳千五百貫目之御失費ニ相成申候、尤引下ヶ候節ニ至、抱合米にて御失費鮮キ様ニ私相働申上候含は、不作年高直之儀ニ付翌年豊作と儘見極メ候上は、折を見合繫ニ掛り、譬老引下ヶ候節は抱合米にて繫之利分五分丈は取返差上候手便も御座候⁽¹²⁾

と述べ、米価低落の際も抱合米と帳合の掛繫で切り抜け得ると見通している⁽¹³⁾のであり、筑後米による相場差益は考慮外に置かれている。

手津正の相場師としての利勘に望みを托した久留米藩は、翌六年、大坂に手津屋の出店の開設を認可、国許では、手津屋による生葉・竹野両郡下の農村の年貢米の徴集廻送を請負う「村通イ附」が始まっている。大坂出店の開設については

大坂表ニ出店御免奉願上候節ニ、三沢様不浅御心痛御苦勞被遊被下、御家老様方并寺社方様江色々御相談被遊被

下候御蔭ヲ以、大坂出店之名前手津屋正助ニ被為仰付候御義ハ第一後年ニ至リ御上之御弁利之御種子ニも相成候義ニ、三沢様御思召込被遊候御模様ニ而、実以御上之御為ニも相成候へかしと御思召、大坂出店御免被為仰付候、三沢様御忠信之御賢慮、誠ニ身ニ染難有奉存候訳は、右出店御免ニ付買持一件之ためニも別而よろしく、右出店ニ而御国産之品々一切入札代銀掛出しニ売方仕候得は、年中人々損かけられ候氣遣無之、万事ニ付出店ニ而凡銀百貫目位イ年から年中御益筋之種子ニ相成候⁽¹⁴⁾(下略)

と、その経緯が記されており、買持米と国産品の売捌きの便宜の為に藩当局が開設に尽力したものであった。

また「村通イ附」と呼ばれる久留米藩領内の一部農村における年貢米の徴集とその廻送請負の実態なり、意義については不明な部分が多いが、手津正自身の云い分によれば「私調達之代リニ御渡高御米村通イニ御附渡被仰付」(文化七年通附議定書)とあって、発端は田主丸本店周辺の竹野郡三三カ村が手津正の「村通イ附」に指定され⁽¹⁵⁾、その年貢米が手津正の調達銀の返済に引当てられ、国許渡しの上、手津正の手船で大坂へ廻送された。そして手津正の買持の規模が拡大するにつれ、「村通イ附」の範囲も拡がっており、大坂廻送もその一部は出店へ搬入され、「町米」の名目を付して販売され、藩債と指引されたらしい。

別段極御内々申上候、大坂御屋鋪御館入御用聞中初、浜方一統共ニ、御廻米之内聊ニ而も私店着ニ被遊候御義は至而嫌ひ申候義ニ付、何方共ニ私村々江借付銀之替リニ取立候米雜穀菜種、大坂店ニ而売払、右代銀ヲ以諸御蔵米御切手買持、夏海上見送り得正利候義第一ニみせかけ候ゆへ、今年之所は大坂一統此義ヲ誠ニ思イ込申候ゆへ、私買持之御切手も、私之思惑ニ而毎年諸御蔵米御切手買持候義と申事へ、浜方も大方左様ニ承知致居候趣キ、第一大公儀之御役人様方迄も左様ニ御思召込被遊被下御義、幸之御義ニ奉悦候、 中々間ニは御館入御用聞之内ニも邪推イヲ廻し、正助店ニ御廻米之内少々宛ニ而も御内分分店着ニ被遊候様ニ相察し、譬いヶ様ニ申上候共

決而左様之事ニ而ハ無之、正助義御国元初隣国之村々迄も借付銀入レ込、惣ハ出產之米雜穀菜種子取立差登候義と御申聞置被遊被下候様ニ木村様・岡本様江別而御願申上候、尚又大坂御用聞中ハ何ニも不知ニ、正助店着ニ聊ニ而も被遊候節ハ、御俵印付ヲ無俵印並ニ石五匁方も下直ニ御売立、御損ニ相成候様ニ大坂御用聞之内ニ思込申候義、尤ニ奉存候得共、委細ハ御役頭様方御存被遊被下候通、毎年御俵印附御売撫シ直段ニ而勘定申上候義ハ決而相違無之、其上第一ハ御廻米六万俵通ニ付ニ被為仰付候得ハ、御国元ニ而瀬下ル元舟迄之上荷ちん斗りも内端ニ六百貫文ハ御益ニ相成、村々百姓之手前ニ而ハ毎年三百石充百姓之益ニ相成、其外百姓中麦植付はやく仕廻候義、万事之益と先達而書上ケ申上候（中略）、又譬右高位イ却而御不益ニ相成候通も、御米五万石も拾万石も買持仕候得ハ、大坂店ニ而米わつか式三万俵位イ、私村々之かし付取立米丈売立、惣ハ拾万石之御切手ヲ買持申候時ハ、御肝心之御切手ヲ御才覚之御切手買持候様ニ大坂中ニ申立候節ハ、一向買持出来不仕候義ニ付、譬ハ店着之御米ニ而少々御失費相立候而も毎年三四万俵位イハ御内分ニ而御廻米通イ付被仰付、店着ニ不被遊下候而ハ大キニ不都合ニ相成候⁽¹⁷⁾（下略、傍点引用者）

これは文化九年五月六日付の手津正數願書扣の一節であるが、文中、「村通イ付」の効用についても触れている。筑後藏の内命を受けた手津正の買持が従前から藩の債権者である御用聞や館入商人へも秘密裡で行なわれ、一介の久留米商人が大量の買持を行なうことに寄せられる世上の疑惑に對し、飽くまでも筑後藏とは無関係であることを示す欺瞞工作として、町米に擬した藏米の出店への廻送を必要としたのであった。

納屋米雜穀問屋として手津屋の大坂における町米の販賣の実態は明らかではないが、伊奈健次氏の調査によると、藏米出切手の形式を完全に摸した米手形が手津屋によって発行されており、次掲表は林田家に残存していた文化八年分を示したものである。もちろん同年の「町米」販賣の全貌を示すものではないが、七月二十二日札から八月十八日札まで一、三八〇俵

大坂における手津屋発行の筑後町米切手の残存状況（文化8年）

札 日 付	手形日付	宛 書	手形銀額×枚数	売出俵数
7月22日	8月9日	堺屋 善 蔵	537.5×2	60俵
7月晦日	8月9日	中嶋屋 利 八	534.1×1	60俵の内
8月2日	8月9日	西村屋 弥 七	530.5×1	300俵の内
8月2日	8月10日	伝法屋 庄 助	531.5×5	150俵
8月5日	8月9日	柳 屋 利兵衛	530.0×1	60俵の内
8月5日	8月9日	米 屋 太 助	530.0×2	60俵
8月5日	8月10日	尼崎屋 勘兵衛	530.0×2	60俵
8月5日	8月10日	川内屋 庄兵衛	530.0×1	30俵
8月5日	8月10日	丹波屋 伊三郎	530.0×1	30俵
8月5日	8月20日	明石屋 吉兵衛	530.5×1	30俵
8月18日	8月19日	富田屋 久兵衛	532.0×1	30俵
8月18日	8月19日	灘 屋 善兵衛	532.0×3	90俵
8月18日	8月20日	近江屋 儀兵衛	532.0×1	30俵
8月18日	8月20日	中嶋屋 利 八	532.0×1	30俵
8月18日	8月20日	米 屋 卯 八	530.0×4	180俵の内
8月18日	8月20日	加嶋屋 藤 七	532.0×3	180俵の内

伊奈健次「手津屋の成立と大阪堂島における米穀取引」p35より

注 手形1枚は30俵（10石）

第11表

文化6年10月、御米5万石、抱合米5万石、10万石高の鋪銀1,000、目入用の手当

I 案

銀 300,000目	手津正口入を以て三井・加嶋、出銀
360,000目	手津正「村通イ附」18,000俵廻米渡分
100,000目	手津正、奉献分
91,000目	〃 大坂にて別段調達
851,000目	計
149,000目	不足銀（村通イ附追加8,400俵）

II 案

330,000目	御廻米18,000俵（6,000石）御国許にて御渡高其冬、売振直段石55匁替
48,000目	内運賃掛物引
282,000目	受取
300,000目	三井・加嶋屋両家、請取
418,000目	已10月、追々私調達にて相凌申上
1,000,000目	計

文化9年5月6日付歟願書より

分が八月九日から同二十日までの間に、一六名の米仲買へ引渡されたことを示しており、端境期の販売が行なわれている。なお、手津正の他蔵米の買持はこれらの仲買を介して行なったと思われる。

手津正買持の初年度の文化五年、藩から支給されたという鋪銀千貫目が、どのような形で工面されたかは知り得ないが、翌六年、前年と同規模の買持を行なうに当って、当初第一案のように手津正から申請されたが、手津正の奉獻分百貫目は、このような用途に流用することを藩が認可せず、不足銀の補填として要求した「村通イ附」八、四〇〇俵の御渡方も不調となつて、第二案のように修正されている（第11表）。「村通イ附」米の大坂廻送の運賃は、藩が負担していることが判るが、鋪銀の二八%が「村通付」米、三〇%が大坂両替商、四二%が手津正自身の調達によつてゐる。同年の買持の実態を伝える惣勘定書（第12表）は、文化七年八月に中勘の形で行なわれている。手津正自身の買持は五万〇一〇〇石で、元銀二、七五九貫五九〇目（①②④）、⑤⑥⑦の加嶋屋取組みは恐らく鋪銀調達のために引当てられた入替銀を意味すると思われる。⑧⑨⑩の已年米買持二万五、一〇〇石については、①②④の買持に計上されない間屋口銭・掛屋入目が付加されており、文化九年五月二二日付の手津正の口上書中に「已年式万五千石買戻し」とあるのが、恐らく、これに該当すると思われる。元銀合計四、七八〇貫余のうち、藩から返下されたのは一二%の五八七貫目弱、残銀の元利から追々返下分を指引、当冬買持のために手津正が藩へ請求する銀高は四、一六三貫目弱から手津正受持ちの六万石（石五〇目替）分三千貫目を指引いた一、四六四貫目余で、十一、十二月迄に藩が手配りをしてくれることを願出ているのである。

該勘定書には損益計算がないので、同年の欠損額を知ることとはできないが、伊奈健次氏は「この損失は後日藩から返し下げとして、時に利分を付して填補されるのであるが、之までには手津屋の損益勘定となるのであって、その犠牲は翁（正助―引用者注）が負担するのであるから（中略）、藩当局は大坂蔵屋鋪発行の米切手の運用に関する、この

第12表 巳9月(文化6)ノ午10月迄惣勘定違書

文化7年午8月

筑後蔵空米切手考(鶴岡)

元 銀	利 銀	元 利	摘 要
① 195,225.00	18,936.80	214,161.80	巳9月2日札夏大豆4,000石買持并巳9月ノ 10月迄6朱半, 巳11月ノ午2月迄8朱, 午3 月ノ10月迄6朱半利足(石48匁81)
② 1,781,765.00	149,668.10	1,931,433.20	巳年米32,100石買持并巳11月ノ午10月迄引 直歩, 利足(石55匁51)
③ 560,000.00	47,400.00	607,400.00	辰年米10,000石買持=ノ御才覚被仰付候分 (石56匁)
④ 222,600.00	18,253.20	240,853.20	別米4,000石買持并巳12月ノ午10月迄利足 (石55匁56)
(2,759,590.00)	234,258.10	2,993,848.10	買持50,100石〔大豆共〕計
⑤ 235,000.00	7,255.00	242,255.00	加嶋屋作次郎方御米5,000石取組, 右米午2 月迄及延引, 引直歩相掛候分, 且加嶋屋日合 昨年他方ノ上直(石47匁)
⑥ 7,256.00	377.30	7,633.30	上記米5,000石代235,000日午2月勘定相立 残(利)銀午3月ノ10月迄8ヵ月分6朱半
⑦ 5,318.10			卯年古別米2,200石入替銀高151,946匁38 午2月迄加嶋屋ノ引直歩相掛候高(石69匁10)
⑧ 200,000.00	12,500.00	212,500.00	巳12月4日納別段調達被仰付候分并 午7月迄の利
⑨ 681,220.00	57,220.40	738,442.40	巳年御米12,000石買持=ノ11月13日札ノ17 日札, 撫56匁60替, 問屋口銭, 掛屋入目共
⑩ 454,160.00	38,035.20	492,195.20	巳年米8,000石買持=ノ10月13日札ノ同17日 札迄, 撫56匁60替, 同上
⑪ 113,540.00	9,574.00	123,114.00	巳年米2,000石買持=ノ, 11月13日ノ17日迄 之札, 撫56匁60, 同上
⑫ 128,386.00	10,527.50	138,913.50	巳年別米2,300石買持=ノ, 12月15日札 撫55匁65替, 同上
⑬ 44,656.00	3,661.70	48,317.70	巳年別米800石買持=ノ, 12月15日札 撫55匁65替, 同上
(1,421,962.00)	119,018.80	1,540,982.80	〔巳年米25,100石買戻カ〕小計
⑭ 元銀合計	4,781,072.48	(但し⑦卯年古別米2,000石加嶋屋 入替銀151,946匁38を加算)	
⑮ 内	235,000.00	御返下分(加嶋屋取組午2月勘定)	
⑯	151,946.00	" (加嶋屋ノ卯年古米御引取相成分)	
⑰	200,000.00	" (御国元にて当7月私裏印致し御切手調 達を以て)	
⑱ 三口計	586,946.30	御返下分(⑮~⑰)	
⑲ 元銀残高	4,194,126.18	巳冬御才覚=相成候分(⑱-⑮)	
⑳ 利銀計	373,041.20	去冬御才覚之利足(①~⑬の利銀)	
㉑ 元利計	4,567,537.38	⑱+㉑	
㉒ 内請取分	390,000.00	午4月17日ノ5月20日迄迄々御返下相成候分	

第12表 (続き)

㉔	15,021.00	上記戻り歩午5月より10月迄6ヵ月分月6朱宛
㉕ 元利へ	405,021.00*	(㉔+㉕)
㉖ 指引残て	4,162,516.38	(㉔-㉕)
㉗	441.10	日合付落分書出し
㉘ 計	4,162,957.08	右高当冬御渡方被仰付被下候分
㉙ 内	3,000,000.00	午年御米60,000石私当冬受持、石50目替
㉚ 残て	1,464,254.40	右高霜月極月迄=御渡被仰付被下候様願上

* 此外=64,000目并22,402.匁03、去冬鋪銀=御渡被仰付候分、此所差引=相立候ては私迷惑=相成候訳は、御切手御引取仕廻=相成不申候内は、入替方が取返候事出来不仕候=付、右鋪銀は当冬にも1,000匁目全高鋪銀御渡=相成候上御差引=相立可申上候事

伊奈隆次「手津屋の成立と大阪堂島における米穀取引」p57~60 () [] は筆者の補注

重要な藩米の売捌の掛引を翁に委嘱したのである⁽¹⁸⁾と説明されている。ただし、該勘定書にみえる買持・買戻し元銀に付加された利銀は、堂島の商慣習に即応した算用がなされており、別段調達分を除けば、手津正自身の商業ベースの利銀収入の有無は判らない。

久留米藩における文化六年の「御改法」は過米切手の増加を極力阻止する方針を打出たとされるが、文化七年、手津正の買戻高は五万石となっており、買持鋪銀千貫目の工面も「半高位は上り御切手を以御凌申上候」などと、過米切手の増加を阻止し得る状況は認められず、専ら凶作による米価の高騰を期待するも僥倖は訪れず、豊作による低米価の続くうち、文化七年十一月二日大坂における御買米令の発令を事前に「去ル御太切之所」から耳うちされ、発令前の買持米を教唆された手津正は、十一月一日から翌年二月五日にかけて、肥後米三万二、三〇〇石、筑前米三万七、八〇〇石、肥前米一、〇〇〇石、備前米五〇〇石の計七万一、六〇〇石を買付け(第13表A)、八年一月末から五月にかけて売払い、利益銀九七五貫七六匁(取引問屋二軒とトラブルによる損銀引)をあげ、入替利銀など諸費用を指引いた純益(本手取分)五四四貫二六〇目を以って、筑前・肥後古米一万石を買付け、国許へ廻送している(第13表B)。

史料で伝える限り、手津正の米相場が大収益をあげ得たのは、この時限

りと見られ、決算報告書に「全ク御役頭様方は迄御工夫之御蔭ヲ以程能買附出来仕、近年珍敷利分有之奉悦候、併肥後新米坏は余り早売致、残念奉存候、併不存寄大銀御利益相成奉悦」と、祝着を表明しながらも、見通しの悪い売急ぎを悔んでいる。しかもその利益銀は過米切手の買戻しには当てられず、安価な他藏古米の買付と国許への廻送に充当されていることが注目されるが、これはその半額分が同年秋に予定されている藩米の無印俵による手津屋大坂店廻送のための手当米としての含みを持つものであったことが、一年後の六月四日付の願書中で説明されている（後出第15表「未年御米買持勘定帳」の⑮参照）。

この時の買持の大利は江戸十組問屋が御用買米を秘して、堂島へ大量の買付注文を発したことにによる大藏物の暴騰によるものであった。「其後ニ至リ浜方之者知らぬ者は無之候程大数□金もふけ仕候様ニ大評判仕候」と、手津正の存在が堂島浜において一頻り評判になったことが窺えるが、その得意も束の間、その後の買持はこの江戸十組の大量買付が御用筋であることが判明した時点から市場混乱を起し、景氣が急速に冷え込んだため大欠損を生じたのである。

文化九年五月九日付の手津屋口上書によると、

近年豊作打續、大公儀様が一昨冬ノ江戸大坂町人中ニ買持米凡六拾万石高も買持被為仰付ひ趣キ、右之内江戸十組筋ノ肥後米 筑前米・加賀米・広島米四藏物ニ而三拾万石も十組筋ノ買持分は追々江戸表ニ積取候風聞ニ而、去冬当正二月頃迄ノ右風聞ニ而少も相場ニひゞき不申候所、二月末頃ノ中々江戸江積取候銀子出来不仕候風聞申立、夫ノ追々不位イニ相成候所、十組筋ノ不位イニ相成候而も、兩替方へ追敷銀も得入不申候ニ付、大公儀様ノ御慈悲之□五万両も御下金十組筋江御拝借被為仰付候由之所、大坂よわ氣之はた売仕候惡心之者之申立候事ニ御座候哉、右五万兩御下金、箱ニ石等入、江戸ノ馬ニ付越候坏と惡評申立候ゆへ、次第ニ不位イニ相成候様、十組筋ノ兩替方江追敷差入不得申候ニ付、先月初頃ノ十日時分迄ニ十組筋ノ買持之筑前古米老石ニ付四拾老及余位イ迄下直ニ拾万石高も切付申候ニ付、夫ノ諸御藏米古米新米共ニ誠ニしやうぎたをしニ大下落仕候ゆへ、私義御屋鋪御大切之受持大敷之義ニ付、既ニ御一大事ニ相拘り候様ニ相成候ゆへ、極々無抛、木村様・岡本様江御歎キ御願書相認メ、甚以乍恐、新御切手四万石も御内分ニ而も御拵不被仰付候而ハ、中々相凌申上兼候段御願申上候所、早速

山田屋市右衛門	7.12. 6 " 7.12. 7 7.12. 7 7.12.14 (12カ) 7.10.21 7. (12)22 カ (1件分史料の脱漏あるか)	筑前 " 2,000 " 2,000 " 3,000 " 2,000 " 1,000 " 2,000 " 2,000	55.20 55.30 55.10 55.00 55.00 55.00 55.60	55,350 119,900 110,500 165,450 110,300 55,150 111,500	8. 1.26 8. 2.16 " 8. 2.6 (3カ) 8. 2. 9 8. (3カ)10 8. 3.20 8. 3.24 8. 3.28 8. 7	筑前 " 500 " 5,000 " 800 " 500 " 400 " 100 " 100 " 200 " 400 " 100	57.50 65.80 66.00 71.00 74.90 75.30 76.50 79.20 78.00 83.00	28,750 329,000 396,000 56,800 37,450 30,120 7,650 15,840 31,200 8,300	166,210	
(筑前計)		14,000		774,900		14,000		941,110		
	7.12.22 7.12.23	肥後 " 4,000	59.00 59.00	177,450 59,150 236,600	8. 1.27	肥後 " 4,000	67.00	268,000	31,400	
(肥後計)								268,000		
山市方総計	7.12.21 8. 2. 5	肥前 " 1,000 備前 (19,500)	49.20 53.50	49,350 26,825 (1,087,675)	8. 3. 9 8. 3.22	肥前 " 1,000 備前 (19,500)	60.60 60.00	60,600 30,000 (1,299,710)	11,250 3,175 212,035	
吹田屋 与 八	7.10.15 7.12.15	筑前 " 2,000	54.30 55.20	54,470 110,700	8. 4.25 " 8. 4.29 8. 4. 29 8. 5.20	筑前 " 100 " 100 " 1,300 " 500 " 1,000 " 3,000	81.00 81.50 81.00 81.00 75.00	8,100 8,150 105,300 40,500 75,000 237,050	71,880	
(計)		3,000		165,170						
総 計		71,600		4,048,682		71,600		5,035,255	975,766	10,732カ

第13表 B 文化7年冬買持利益計算

午年切手買持	71,600石 (内訳は表A参照)
買入元銀総額	銀 4,048, 〆682匁
売 払 総 額	" 5,035, 255匁
利 益 銀 (A)	975, 766匁 (長浜屋伊勢松取扱 筑前米 1,000 石分 肥後米 9,000 石分 閏2月 〆4月迄日廻10 〆732匁を差引た額)
内 〆	
142,049.48	筑前・肥後買入元銀 4,058 〆556匁 70, 午11月 〆未1月迄引直し 歩, 10 〆目 = 付 350 目替日合高引
61,822.43	惣買持日合3分日廻し御屋鋪の分は8朱ニノ勘定仕〆 = 付1朱宛 の日合相弁其外筑前新米・肥後新米売付分之儀4月迄相掛〆日合 の足銀, 諸品入用, 別紙目録の通り
135,733.25	堺屋善六掛合損銀同人分証文の通り
91,800.00	長浜屋伊勢松掛り合損銀同人証文の通り
〆 431,405.16 (B)	
544,360.84 (C)	A - B 御利益本手取分

上記御利益本手取分 = 而

筑前・肥前古米	10,000石 × @57匁替 = 570 〆000目
右古米御国積船方中給銀	6,400目
大坂川船上荷賃 (60俵積1艘 = 付1斗1升充入用, 500艘 入用 = 付550石入用, 57匁替代銀)	31,350目
合 計	607,750目 (D)
(D) - (C)	足銀入用, 63,389匁16
	右は古米の御利益の内にて差引相立可申

手津屋屋正助 文化8年末6月晦日勘定

御江戸御国元五御掛合被遊被下候段、甚奉恐入候儀は私不忠ニ而大用之取斗方も仕、ケ様之義も出来仕候哉御赤面被遊候段、甚奉恐入、極々歎ケ敷奉存候、併し此節之義ハ誠ニ人力ニ而参リ不申候義、誠ニ天才之百年目と御思召替被遊被下、何卒御慈悲之上重々耳様ニ御聞濟被遊被下候様偏ニ奉願上候と述べられてゐる。江戸十組の買注文は専ら肥後・筑前米等の銘柄物に集中したから、注文に応じ切れない大坂問屋は、一時の凌ぎに他蔵物の米切手を買付け、入替える便法をとったから、この市場の混乱に便乗した諸蔵の過米切手の増発は必至であつたと推測され、筑後蔵も例外ではなかつたと思われる。⁽²⁶⁾

江戸十組の大坂における余りに大量な買付が幕府御用であつたことが發覺し、種々の疑惑や風評がとび交り中、

十組は買持分の相場下落に伴なう追鋪銀を入れなかったため、両替屋は十組買持の筑前古米を下げ相場で売払ってしまった⁽²⁷⁾(切付ル)から、諸蔵米も一斉に大下落となり、大量の買持を行なっている手津正も大恐慌を来したのである。

三井大坂両替店の相場日記によって確認すると、当時の建物筑前米の相場は文化九年三月二日以降二五日まで、六八匁、六九匁五分、七二匁二分、七二匁八分と騰勢にあったのが、二六日一挙に六匁八分下げの六六匁となり、以後四、五日反騰をみせたのち、四月一二日には五六匁二分に下落しており、大下落の三月二六日の箇所には「今日大下落ニ付松仁方ニ而尋合候処、当春已来追々買ノ居候者、少々含筋ニ而昨日追々売掛候ニ付大下落之由ニ候事」と傍注があり、この時の市場混乱で特に十組の買注文を引請けた堂島米問屋の倒産は少くなかったらしい。

筑後蔵が過米切手の買戻し及び米価低落による買持の欠損を補填するために、新たな過米切手の発行という悪循環をくり返していたことは、上引の願書中に「新御切手四万石も御内分ニ而も御拵」と願っていることから察しられるが、その結果、文化九年五月九日付の口上書提出時には、手津正の買持の規模は抱合米共に二〇万石の規模となり、「私受持高式拾万石高一日ニ譬毫匁引下ケ候而も一日ニ貳百貫目も追敷銀入用仕候」という非常事態に直面したのであった。文化九年十月七日付「乍恐私受持之御切手此節大下落ニ付直合不足高書上ケ御敷申上候覺」と題書された手津正の報告によれば、この文化八年の買持損銀の内訳は次の通りである(第14表A)。

表中、筑後蔵分の午年古切手六、一二〇石は買戻しとみられ、石当り六五匁五三を要し、抱合米は九万千石で、うち十組の買付の失敗で暴落した筑前米が六万五千石を占め、損銀の総額は三、四二〇貫目に上っている。日合利銀は損銀額の中から抽出したものであるが、手津正自身が堂島の仲買株を有せず、仲買を介して米取引を行なう不利は否むべくもなかったと思われる。もっとも、この時点での損失額は、後日値上りがあれば軽減する可能性が残されては

第14表 A 未年米(文化8)買持損銀内訳

「乍恐私受持之御切手此節大下落=付
直合不足高書上ヶ御敷申上ひ覺」(林田家文書 1563
文化9年申10月7日 3A)

	銘柄	石数	買持 単価	今日 相場	損銀額	内日合利銀	日合期間
筑後蔵分	未年米	85,700	53.00	48.00	946,283.57	517,783.57	未11月 δ 申10月迄
	未年別米	8,800	50.68	45.00	100,829.77	50,842.54	"
	未年夏大豆	15,100	57.00	48.00	249,829.20	113,929.20	未8月 δ 申8月迄
	午年古切手	6,120			401,050.80	18,388.70	(買戻しか)石65匁53
	計	115,720			1,697,993.34	701,034.01	
抱合米	未年筑前米	65,000	61.65	49.00	1,279,108.50	456,858.50	未11月 δ 申10月迄
	未年肥後米	4,600	61.80	48.50	93,590.10	32,410.10	"
	未年広島米	6,500	53.25	42.20	112,734.10	39,609.10	"
	未年米子米	7,000	47.95	36.20	120,516.70	38,266.70	"
	未年中国米	7,900	46.75	37.30	116,760.90	42,105.90	"
	計	91,000			1,722,710.13	609,250.30	
総計		206,720			3,420,703.47	1,310,284.31	

第14表 (B)

文化8(未)年買持不足銀総額	3,420,703.64	(1)
内		
鋪銀引	2,000,000.00	(2)
引残而 今日之所不足高	1,420,703.64	(3)
又内		
私調達=て追鋪入, 当5月迄	270,000.00	(4)
8月24日本米御切手 追鋪=御渡方被仰付 2,100石		
" 私 δ 天忠殿返済分追敷差入分 800石		
9月17日 追鋪=受取 + 200石		
今日相場 @48匁 \times 3,100石	148,800.00	(5)
別米追鋪=受取今日相場 @45匁 \times 500石	22,500.00	(6)
10月7日 私調達追鋪差入	20,000.00	(7)
古夏大豆置居=追鋪之積り @43匁 \times 10,600石	434,600.00	(8)
(4)+(5)+(6)+(7)+(8)	895,900.00	(9)
(3)-(9) 只今兩替方 δ 借=相成居ひ高	524,803.64	(10)
未年御米・別米・夏大豆買持高	115,700石	
" 抱合米	91,000石	
敷銀3匁 \times 206,700石	620,100.00	(11)
(10)+(11) 当時入用高	1,144,903.64	(12)
(12) 右高無御座ひては此所御無難=相凌申上兼ひ得共 (中略)		
御賢慮被遊被下ひ様奉願上		

いるものの、買持を持続する限り、追鋪銀の手当が必要であり、日合利銀も加増する筈であるから、余程の暴騰が訪れない限り、この暴落による損銀を消却することは絶望的であつた。しかも追鋪の調達ができず、無鋪となれば、両替から用捨なく切付けられる懼れがあつたのであり、第14表Bのような計算の上、銀一、一四五貫目弱の追鋪銀の手当てを落へ歎願しているのである。

文化六年に開設された手津屋大坂出店の二階の密室では、手代にも明かすことなく、手津正と藩役人とが、如何にしてこの窮状を切り抜けるかの相談に明け暮れる有様が、何通も認められた超長文の歎願書扣から察知することができる。この時点で手津屋の強氣も後退し、余りの欠損に不信任を募らせ「赤面」する藩重役に対して、買持の規模の縮少、ついでその徹退を歎願している。

御上御初御役頭中様が私ニ御疑御掛被遊被下ひ節ニは大坂表ニ而益私評判悪敷相成候は、只今御大切之御切手誠ニ私身分不相応ニ大枚之受持仕居候所、第一番ニ此一件が御一大事ニ及候節は甚以歎ケ敷儀、第一私儀は兼而申上通一命身代共ニ御上が之大切之預り物ニ付、只今ケ様之御咎被為仰付候共、此節私無失之御疑を奉蒙、右御大切之拾万石余之御切手両替方ニ入替ニ相納り不申候節ニは、誠ニ御一大事ニ相拘り可申候哉と、此事而已甚歎ケ敷奉存上候間、御表向が御歎書一冊奉指上候通ニ如何様共御宜様ニ御差図被遊被下、何卒当冬新御米大坂御屋鋪ニ而御入札ニ相成候迄ニ、私受持之御太切之御切手を大坂御用聞中歎、又は浜方御館入中ニ御割付、御受持せ(29)
被遊候

と、当時筑後米一六万石（他に抱合米一〇万石）に及んだ買持を、大坂御用聞や浜方へ分散されることを願出ている。従前彼らに対しては蔵米切手操作の内実を秘密裡にすることを得策とし、「有様巳年御米私受持之九万四千石余浜方ニ而御買戻被遊候節ニは四、五千貫目も御失費ニ相成候上、大坂中御評判御悪敷(30)」と自負していた手津正も、それから

一年半後の最悪の事態の発生を予見していたかの観がある。

手津正が藩から内命を受けて行なった買持・買戻が予期した成果を上げ得ず、苦境に陥った背景には、待ち望む凶作が訪れず豊作続きの米価低落と、そのために幕府が採った御買米令・御用金の賦課による大坂市中の金融梗塞など、種々の要因が絡んでいるが、直接的には、十組の御用買米による大坂米問屋の相次ぐ倒産で、手津屋の取引先が極端に限定され、一見して空米切手と察知できる大量の筑後米の買持が表面化したこと、文化七年・九年の御買米令の発動で、買戻しが困難を来したこと、更に文化九・一〇年の諸藩に対する廻米制限令などが、筑後蔵の破綻を決定的にしたと思われる。

度々引用する六月四日付の手津正内願書が提出された文化九年は、「米府年表」によると、二月に八代藩主頼貴が逝去、三月九代頼徳の家督があり、幾許もなく四月末には関東筋川々御普請御手伝を拜命と臨時の物入りが相つぎ、国許では五月に家中寺社家来人別銀・在方畝掛り・町方小間掛り銀の賦課と御勝手方御差支が仰出されている。翌十年の初入部を控え、手津正の同内願書の後半で、

今年明之所、別而御大切之御年柄と奉察上候間、何卒御役頭様方々此上御明智を以、一兩年之所御無難ニ御凌被遊被下候内ニ、御入部御参府御目出度御添被遊候上ニ而、大坂御切手御減シ之御賢慮若御行届兼被遊候節ニは、前文申上候通何ぞ御国御屋鋪様斗リニ不限、諸御蔵御屋鋪御一統御もて兼可被遊御義ニ付、私買持之石高凡拾万石斗リニ、右高私買持入替銀は私々調達仕、御切手引取、御屋敷江相納申上候義不行届ニ而私々御切手はた売仕候様之私、大無調法之義、御公儀之御咎を私引受、毛頭御屋鋪御役頭様方之御無急ニ相成不申候様之工面存付も有之候、然ル上ハ私義御公儀之御咎ヲ奉蒙リ、一式ケ年も大坂ニ而入牢仕候ハ、相済可申候哉、若御政道被仰付候ハ、幸之儀、私虫同前之一命聊之御用ニ相立奉悦候儀（下略）

と、膨大な過米切手の処理を、筑後蔵に代って、手津屋が一〇万石程度「はた売り」の所業として消却する案を提言している。文中、過米切手の発行が筑後蔵に限らず、諸蔵屋舗共通の事態であるという認識が、この提案の根底にあったように見受けられる。

手津正の肩代りによる計画倒産を発想させるに至った莫大な損銀も、手津正の云い分によれば、百年に一度か二度あるかないかの米価の大暴落の故であり、買戻しなどは自分の才覚で極力損銀額を縮少し得たと主張するのであるが、文化十年二月に作成された「末年（文化八）御米買持惣勘定帳（第15表）」によって、この非常事態がどのように対処されたかをみてみよう。

文化八年夏大豆二万五、九〇〇俵の買持は翌九年夏、石当り九匁二八の値下りで一五〇〇俵を追加しても、諸経費を含めて六六貫一一八匁余の損失⁽¹⁰⁾、同八年冬から九年十一月迄の末年米一五万俵の買持と六万九〇〇〇俵の買戻には元利銀四、三三八貫四七七匁余を要し、未夏大豆買持不足分の利足四カ月分を加えた文化九年十一月現在の所要銀は四、四〇六貫余⁽¹¹⁾が計上される。そのうち御廻米六万俵（村通イ附カ）ほか、手津正の上納不足分を指引、文化九年十一月の不足銀（手津正取替分）は三、五〇一貫余⁽¹²⁾となる。これに対して申年米一六万三、八〇〇石の米切手が発行され、その代銀額を銀八〇〇〇貫余⁽¹³⁾と計上し、それによって一挙に手津正の文化六年以降の抱合米損銀の補填や、文化九年冬の買持（抱合米共）二五万七〇〇〇石分の鋪銀の捻出を計っているが、なお且つ、手津正の諸種の調達分を完全にカバーするには至らないのである。

なお、この文化十年二月に作成された「末年米買持惣勘定帳」の詳細な検討は行なわれないが、一年後に発生した筑後蔵の取付事件と直接関連をもつ、文化九年冬の手津正買持の申年米一六万三、八〇〇石⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾については、千石につき二〇目宛の掛屋入用銀⁽³⁷⁾が計上されており、所謂応待切手として発行されたものでなかったことを意味する

第15表 (文化8) 未年御米買持惣勘定帳 林田家文書[400]

文化10年2月 手津屋正助

①	301,729.00	未夏大豆15,900俵買持代元銀(文化8未年8月元@56.93)
②	39,939.31	未8月ノ申8月迄の利
③	341,668.31	元利(①+②) 文化9年8月現在
内		
④	256,579.66	申(文化9)夏大豆15,900俵(御売撫48匁41替)代
⑤	20,752.85	御国元ニテ御渡方被仰付ひ申夏大豆1,500俵代銀(47匁65替) 23,827匁85の内、運賃3,075匁引(申夏大豆直下=付追加分)
⑥	277,332.51	④+⑤
⑦	64,335.80	③-⑥ 差引残而不足高(未夏大豆買持不足)
⑧	500.00	店着掛り物
⑨	1,282.89	申年夏大豆5,300石代銀④の半方口銭
⑩	66,118.69	⑦+⑧+⑨ 御不足高
⑪	2,642,000.00	未年御米150,000俵代元銀(未12月元)(52匁84替)
⑫	323,338.52	未11月ノ申11月迄の利
⑬	2,965,338.52	元利(⑪+⑫)(文化9年11月現在買持元利)
⑭	1,223,412.78	未年御米69,000俵御買戻代銀(@53匁19替)
⑮	149,726.14	未11月ノ申11月迄の利
⑯	1,373,138.92	元利(⑭+⑮)(文化9年11月現在買持元利)
⑰	2,058.74	未夏大豆買持不足高⑦の利足、申8月ノ申11月迄4ヵ月8朱
⑳	4,406,654.87	四口元利(⑩+⑬+⑯+⑰)(文化9年11月現在)
内(請取分)		
㉑	841,856.10	御廻米の内60,000俵御国許ニテ御渡代銀964,856匁10の内 御運賃銀123匁目(石6匁充)引去り
㉒	5,275.00	未8月夏大豆正買2,500俵代銀85,275匁の内80匁目納メ、残り 不納分
㉓	675.20	未8月ノ申12月迄16ヵ月分月8朱(石102匁33)
㉔	10,000.00	申3月23日受取
㉕	720.00	3月ノ11月迄9ヵ月分利、月8朱
㉖	30,543.36	未冬御国為銀の内362,500目申春納分7,000石[21,000俵]代銀の 内18,790俵(53匁替)=ノ331,956匁64引残り不納分
㉗	13,247.30	上記18,790俵の内届不足728俵代
㉘	2,790.00	御手船久永丸1,350俵の御定運賃御振替分
㉙	905,106.96	㉑~㉘の計(文化9年11月現在)
㉚	(3,501,547.91)	㉑-㉙ 引残り不足高(この箇所貼紙にて[3,504,593匁54])
内		
㉛	6,991,295.00	申年御米142,800石、申10月24日札ノ同11月23日札(@48.96)

第15表 (続き)

③①	1,009,000.00	申年御米 21,000 石、西 2 月朔日・同 4 日兩度ニ受取 (②48.05)
③①	8,000,295.00	②③
③②	4,498,747.09	③①-③② 御渡過〔貼紙にて4,495,701匁14と訂正〕
内		
③③	403,318.51	巳年(文化6)抱合米代銀御不足、未11月勘定高
③④	1,484,073.45	午年(文化7)抱合米代銀御不足、未11月勘定高
③⑤	1,887,391.96	③③+③④〔巳・午年抱合米未11月現在御勘定不足高〕
③⑥	224,599.64	③⑤の利 未11月ノ申 2 月迄引直歩10貫目ニ付470目、申 3 月ノ11月迄月 8 朱
③⑦	2,111,991.60	③⑤+③⑥ 元利
③⑧	2,570,000.00	申11月鋪銀入用高、但御米夏大豆共157,000石余、抱合米100,000石ノ257,000石余の分
内		
③⑨	1,000,000.00	鋪銀受取
④①	1,570,000.00	③⑧-③⑨ 御不足高(鋪銀)
④①	1,722,710.30	未年抱合米元利差引直達御不足銀
④②	(68,908.41)	申11月ノ西 2 月迄利〔此分棒引抹消にて勘定に入らず〕
④③	5,404,701.19	③⑦+④①+④②
内		
④④	474,430.30	申夏大豆 29,400 俵(②48匁41)代
④⑤	219,000.00	古筑前米 30,000 俵代の内未年御米 15,000 俵御渡方被仰付い代銀 50目替ニノ250匁目、運賃21匁目引残り高
④⑥	15,768.00	申 3 月ノ同11月迄月 8 朱利
④⑦	300,000.00	天忠・天伊殿ノ未年御米切手 7,500 石引当を以調達御渡方分
④⑧	16,800.00	申 5 月ノ同11月迄月 8 朱利
④⑨	1,025,998.30	④④~④⑧の合計〔貼紙にて1,028,388匁30と訂正〕
⑤①	4,378,702.89	④③-④⑨ 〔同上 4,376,303匁60と訂正〕
⑤①	120,367.86	⑤①-⑤②御渡過〔 " 119,367匁86と訂正〕
内		
⑤②	861.33	午年古米50俵(②51匁68)代、調達相納
⑤③	35,780.25	申年御米買持代銀惣高 8,000匁295匁の内 844,245匁本買52,200俵代引残り 7,156匁050目の半分口銭
⑤④	6,117.06	未年御米69,000俵、御買戻代銀1,223,412匁78の半分口銭
⑤⑤	13,290.87	巳冬 1,000 匁目鋪銀の内御米 8,400 俵御渡代預り切手 276匁目調達相納い分利足 8 朱ニノ 22,080 目103文銀ニ直シ御渡シ被仰付い分
⑤⑥	22,140.00	申年御米買持 163,800 石の内、素人兩替へ入替ニ付無口銭分 16,200石引除残 147,600 石高、諸問屋へ入替口銭入用(千石ニ付150目宛)
⑤⑦	3,276.00	申年御米買持 163,800 石分御掛屋入用(千石ニ付20目宛)

第15表 (続き)

⑤⑤	2,372.10	申年夏大豆 9,800 石, 別段買持代銀 474,431 匁の半方口銭
⑤⑥	1,950.00	申年夏大豆惣買持 9,800 石の内 2,000 石堺酢利方へ入替, 口銭不要分を指除, 残 7,700 石諸問屋へ入替口銭入用 (但 千石=付 150 目)
⑥⑥	302.00	上記申夏大豆 15,000 石惣買持高掛屋入目 (千石=付 20 目宛)
⑥⑦	9,618.00	申年夏大豆・御膳米共 1,800 石 運賃銀 11,070 匁のうち, 夏大豆 88 俵届不足引
⑥⑧	6,663.00	江戸御扶持方代銀御不足高申 12 月 9 日納
⑥⑨	20,000.00	御廻米 60,000 俵御国通イ附分, 私店着掛り物石=付 1 匁宛
⑥⑩	122,370.61	⑤⑨~⑥⑨の計
⑥⑪	173,505.69	二口合御不足高
⑥⑫	147,000.00	古筑前米 3,000 石江戸御扶持方当 2 月 6 月迄 1 カ月 500 石宛の積=去 10 月中勘定直段石 49 匁替
⑥⑬	19,350.00	上記古筑前米蔵出積方掛り物并江戸迄運賃
⑥⑭	166,350.00	⑥⑫+⑥⑬
⑥⑮	42,000.00	内受取
⑥⑯	124,350.00	⑥⑭-⑥⑮ 差引残而御不足高
⑥⑰	297,855.69	⑥⑯+⑥⑰
⑥⑱	90,000.00	去冬返納申上候分
⑥⑲	30,000.00	申 7 月御振替分引
⑥⑳	120,000.00	⑥⑱+⑥⑲
⑥㉑	177,855.69	⑥㉑-⑥㉒ 惣御不足高

上記御不足高は御切手ニノ 3,680 石 (石 43 匁 24285 替) 「分相当として上右高何卒御渡方奉願候」と
田中和作外 2 名宛手津正へ提出 ()・[] は筆者の付した補注

第16表 筑後米買持高

年次	俵数
文化 6 巳年	109,500
" 7 午年	大豆共 212,904
" 8 未年	大豆共 325,290
" 9 申年	大豆共 473,700
計	1,121,430

とも思われ、またその総代銀八千貫余のうち、本買五万二、二〇〇俵(一万七四〇〇石)の代銀八四四貫二四五匁分について米問屋への半分口銭が控除されている(⑤③)こと、ごく一部ではあるが、口銭を要しない素人両替への入替が行なわれていること(⑤④)などを指摘しておきたい。

なお、文化十年八月の買持勘定書によると、同年三月末抱合米一〇万二、八〇〇石を含む買持銀元利の総額は一万六、〇一九貫五三〇目八分に上り、そのうち同年五月

に抱合米六万石が石四五匁撫らしで売却され、残石五万石は堺・京都での販売が計画されている。同勘定書中で手津屋が申告している文化六年から九年までの筑後米の買持高を第16表に掲げておく。

前にも触れたように、古切手の回収と入替切手の鋪銀の調達に日夜寢食を忘れて苦慮する手津正が、文化九年春の暴落によって大欠損を招いた時点で、御用買持の規模の縮少・微退を願出、本来の自分商売の利益の中から藩に御奉公したいとの意志を、くり返し表明していた中で、同年冬無謀ともいふべき大量の過米切手の買持を行ない、翌十年には更にそれが倍增する規模となったであろうことは、手津正と取引のあった入替両替加嶋屋作兵衛方に大量の申年・酉年兩年分の出切手が保存されていることから推測される。恐らく手津正から差入れられたと思われるその申年出切手は申十月二十六日札から同十一月二十三日札迄の二一〇枚、酉年出切手は酉閏十一月八日札から同十二月十三日札まで九〇〇枚を数えるのであって、翌十一年春浜方出訴事件が審理に入る直前に大坂の藩役人から江戸留主居へ宛てた書簡中⁽³⁴⁾に、「手津正、池伊其外浜方にて至テ懇意之面々相頼、御屋敷ニテ相手無之拵候切手為売払候分」とか、「切手ニ浜方問屋何某買と申義認込候義に御座候処、問屋へハ勿論咄も致不置候而減法に買主書入候而売出置候切手にて実は謀判同然之取斗ひに御座候」と、この時の空米切手作成の様子が報告されている。手津正の他に、池田屋伊兵衛ら若干の堂島仲買（正米問屋）が、これに加担していたことが窺えるが、このような「謀判」行為に踏み切った背後には、前に手津正が提言した計画倒産による筑後蔵の出来停止、それを受けての切所持人の出訴を期待していたと思われるふしがある。文化十一年正月十九日付の手津正の内願書⁽³⁵⁾には、鋪銀の不足の故か、手津正受持の切手が先々ではた売⁽³⁶⁾され、諸方入替も困難となり、申十一月より大数の受持切手の日合は酉九月迄に凡銀千四、五百貫目、抱合米の直合不足分凡六百貫目、合わせて貳千貫目余は何とか調達できたが、昨秋は例年「村通イ附」で御返下の御米六万俵も廻送されず、諸問屋への利払いも困難である窮状を訴え、「只々一時も御早く御徳世之御取斗被遊可被下儀

を相築」み、「此節諸問屋中ニ正当之利詰メニ相掛候得は却而大銀差出、御切手を速ニ引取相納申上候様ニ相成候得は、又々大崩ニ相成候儀ニ付（中略）只々一時も御早く御徳世之御安氣被遊被下候様御工夫而已奉願上候」と、筑後蔵の出来停止に踏み切れることを教唆し、「御徳世さへ被遊被下候得は此先き毎年三百貫目充是非もふけたため奉指上候得共、凡三万貫目之御借銀明年八百ヶ年目ニは御速ニ御下ヶ被遊候御儀」と、当時久留米藩の借財が銀三万貫目にも達していたことが知られるが、この願書には、つゞけて徳政実施後の後始末については、堂島仲買の山田屋市右衛門が内密に手引をつけてくれる筈であり、手津正自身は「私受持之分其代リニ裏切り被仰付候得は、鋪銀を成るべく多く取り上げの上、入替方の出訴を逃亡によってかわす決意が上申されている。

注

(1) 筑後郷土研究会、昭和十三年刊行。

(2) 「近世筑後の豪商手津屋商榷史」（史料を主とす）「第一

分冊（発行所・発行年不明）。同書の目次に続刊の予定として、第二分冊「手津屋の水運業、手津屋の貸付資本としての活動」、第三分冊「通付制による久留米藩米の請負、手津屋の社会事業的活動」が予告されてあるが、第二分冊以降が未刊か否かは確かめていない。但し、それらの題目は前引の「林田正助詳伝」に詳述されている。なお著者故伊奈健次は戦後山口大学に教鞭をとられ、同地で奇禍のため他界された由、ここに学恩に感謝し、ご冥福をお祈りする。

(3) 永尾正剛「久留米藩における蔵米販売政策」（社会経済史学）四一巻一号）、「筑後菜種と大坂両種物問屋の動

向」（『西南地域史研究』第三輯）

(4) 手津屋が寛政十年から文化九年に至る一五年間に蓄積

手津屋手船の規模（文化11年）

船名	規模	船頭水主
宝寿丸	450石積	8人
宝蔵丸	450石積	9人
宝年丸	1,300石積	16人
宝正丸	1,300石積	16人
宝久丸	1,400石積	18人
宝益丸	1,400石積	18人
宝悦丸	1,500石積	19人
計7艘	7,800石積	104人

伊奈健次『林田正助詳伝』p4より

(8) した身代は凡銀三千貫目と云われる〔林田正助詳伝〕九五頁。

(5) 「林田正助詳伝」九五頁。

(6) 九州大学九州文化史研究施設所蔵「林田家文書」一二六。以下引用する「林田家文書」は特に断らない限り、同施設所蔵史料である。なお、文化十一年現在の手津屋の手船の規模を示しておく〔前頁表参照〕。

(7) 鶴久二郎氏所蔵林田家文書「御上々預り奉申上候身代店卸扣」

(8) 「筑後菜種と大坂両種物問屋の動向」〔西南地域史研究〕第三輯、二七頁注(10)。

(9) 同右論文

(10) 「林田家文書」六九六

(11) 伊奈健次「手津屋の成立と大阪堂島に於ける米穀取引」六二頁、以下同論文の引用には、伊奈氏論文と注記を略させて頂く。

(12) 伊奈氏論文六二頁

(13) 林田家文書五六四に「諸蔵正米切手道之儀ニ付古来之御趣意御触書之写、林田正助謹写之」なる史料があり、宝暦十一年十一月以降文化七年迄の正米切手に関する幕法・訴願状が書写されており、手津正なりの堂島取引に対する心構えを窺うことができる。

(14) 林田家文書六九六

(15) 「林田正助詳伝」一二七頁、一三一頁。村通イ付の議定

筑後蔵空米切手考 (鶴岡)

書は村役人連印して手津屋正助へ宛てたもので、発端の年文化六年十月の議定書の条文は次の通りである。

一 今般之御用米例年御廻米御蔵納同様内実綱俵共ニ入念相渡可申支

一 浜々ニ而相渡申候節は其御元々老人御差出候ハ、村々共ニ相府長百姓老人夫老人罷出、組役人立會鹿略之儀等無之、重々相改相渡可申事

一 上荷船々々備立積方之節、組村役人立會升目附置、船頭え引渡可申候ニ付、元給ニ而若欠米等有之候ハ、右船頭が為相并可申候事、但船中不埒有之候ハ、吟味之上船商賈為相止可申事

右之通極置、若々不行届之村も有之候ハ、御望之村え引替之儀御取斗可被成候、全躰互ニ実意相守、聊之儀双方申分等無之様堅取斗可申事

(三三カ村庄屋連印)

(16) 現存の文化八年十月五日付「御廻米通附取斗方議定書」(林田家文書一一六)は、手津屋正助と亀王組三〇カ村庄屋との間で取替わしたものであるが、大庄屋の奥印があり、「村通イ附」が徴租機構を掌握した上で実現していたことが判る。永尾氏によれば、同時期の手津正の「村通イ附」は竹野郡下の亀王組・唐島組が対象となっており、更に唐島組大庄屋を通して石井組・田代組からも「村通イ附」の願が手津屋に出され、買持の規模が拡大されていく間「村通イ附」の範囲は竹野・生葉・御

井・御原の四郡に亘つたとされている(久留米藩における蔵米販売政策)『社会経済史学』四一の一、三二頁。

(17) 林田家文書六九六

(18) 伊奈氏論文、五二頁

(19) 本稿八三〇八四頁注参照。

(20) 文化九年五月二十二日付「手津屋正助口上書」の中に

「御改法此方御切手めつたに御増被遊候御儀堅御禁制之儀被仰聞」とある(林田家文書三九九)。

(20) 伊奈氏論文六一頁。なお「上り御切手」とは、蔵米切

手が国許で印刷されることを示すものと思われる(黒羽兵治郎「加賀藩の蔵屋敷制度」△「近世の大阪」▽所収参照)。

(21) 文化九年五月二十二日「手津屋正助口上書」(林田家文書三九九)

(22) 文化九年六月四日「手津屋正助歎願書」(林田家文書

一二六)。なお手津屋は文化五年大坂町奉行斎藤伯耆守から同家の館入としての功勞に対して感状を受けており(伊奈氏論文一八頁)、「去ル御太切之所」とは町奉行所

筋を指すと思われる。また当初手津屋の買持は幕府の御買米令を遵法するものとして、奉行所筋からは好感を以って迎えられたらしい。

(23) 伊奈氏論文四一頁。

(24) 文化九年六月四日歎願書(林田家文書一二六)

(25) 文化九年五月九日口上書(林田家文書六九六)

(26) 「草間伊助筆記」(『大坂市史』第五卷、八七八頁)。

(27) 両替の「切付」とは、「正空賣買聞書」に「客商米損銀に成、追敷無之、敷銀一盃になる故に問屋より見斗にて米仕廻、客方へ其由申遣すをいふ」と説明されている(島本得「堂島米会所文獻集」所収)。

(28) 三井家編纂室「自天明七年至明治四年大阪金銀錢井為替日々相場表」巻一

(29) 文化九年六月四日付歎願書(林田家文書一二六)

(30) 同右

(31) 文化九年五月六日口上書中に「私已前々浜方名染之間屋、年々不成行ニ相成候名前、荒増書記御申達上候、老番ニ布屋熊太郎と申問屋跡形も無之相成、昨年中ニ境屋善六、長浜屋伊勢松・吹田屋与八・天満屋嘉藏・備前屋久藏・米屋市三郎、一昨年々れきく之間屋六軒程つぶれ同然之義、此外ニ能問屋二三軒有之候得共、何方も大

切之御切手ヲはた賣り仕候ゆへ、昨春の様ニ不時ニ直段飛上り申候節ニは問屋皆々身代つふし、私ニ大難題かけ申候義云々」とあり、当時頼りになる造成の間屋は米屋喜兵衛只一軒のみであると述べている。

(32) 文化九年六月四日付歎願書に、午秋より御買米の含みで例年と異なり、古米が新米より高直となったと述べている。

(33) 林田家文書四〇二

(34) 伊奈氏論文一五四頁

(35) 林田家文書四〇七

(36) 米の不実商いの代名詞のように用いられる「端タ売」

とは、幕府の禁令中にも早くから見られるが、その行為の内容は必ずしも明確でなく、「正空買聞書」には「自分正米買持無之に、場所にて正米買渡、又は客方より買

注文申越候節、買付不置、客方へは買付置候由相答、自分買に成居るを端タ賣といふ」と説明されているが、手津正の場合は、自分の買持分を数人の仲買へ分散して預けておいたところ、手津正に無断で売払われてしまったことを指すと思われる。

五 空米事件落着の経緯

公称四二万石という文化十一年の筑後蔵空米事件が落着するまでの経緯を伝えるものは、当時久留米藩の執政であった有馬織部（息焉）の手記を利用した伊奈健次氏の『林田正助詳伝』の終章である。同書は現在稀観本に属すると思われるので、同書に引用された史料及び叙述を借り、私なりの解釈を加えて事件のあらましを辿ってみたい。

$$\begin{aligned} 11\text{匁} \times 90,000\text{石} &= 990,000\text{目} \\ 990\text{目} \times \frac{6}{11} &= 540\text{目} \cdots \text{正銀渡} \\ 990\text{目} \times \frac{5}{11} &= 450\text{目} + 60\text{目} = 7500\text{石} \end{aligned}$$

同書によれば、事件の発端は前節で紹介した手津屋の「徳政進言」が認められた前日の文化十一年正月十八日のこととされる。同日、久留米藩蔵屋敷出入の俵屋庄兵衛と、出入ではないが同蔵の入札権をもつ山田屋市右衛門が蔵屋敷に呼出され、古米切手と新米切手の引換の交渉が行なわれたらしい。古米切手九万石に対して同額の新米との乗換えに、一石ニ付一一匁のプレミアムを付し、内六匁は正銀渡し、五匁は新切手で償還することで一旦は交渉が成立した。すなわち一石六〇匁立てとして一一匁のプレミアムは五四〇匁目正銀渡し、七、五〇〇石分の新切手の増発ということと解される。これで一と先ず落着するかにみえたが、翌日浜方から異論が出て全額正米渡しを要求してきた。その趣意は、古切手の分は堂島浜で売買されて買持った切手であるから、不渡りとなった際にも公訴することができけれども、引換えられる新切手は看札外の切手で、市場で売買することが認められないから、蔵屋敷の利

払いが滞りような事態が起つても、蔵屋敷と相對すくの事で、公訴しても何の保証もないというものであったらしい。筑後蔵では当初から正米渡しの意志はなく、二月二日から出米を要求する切手所持者に対し、この節市中に出廻っている大量の切手の中には、出米請求をしないことを前提として発行した應對切手（借銀の引当に渡した調達切手）が混入しているらしく、蔵屋敷の俵数と切手数が合致しないので、調査が完了する迄は一切出米を停止する旨の回答をした。

浜方出訴の日付は訴状が伝わらないので不明であるが、出訴前に久留米藩が大坂町奉行所の公用人と与力に宛てた出米滞りの釈明には、申年米は虫入が多く、代り米の廻着が遅れ、酉年米も皆着しないうちに出来請求が急増したことを理由にしている（二月）。この表面上の理由のほか、届書に添えられた別紙口達書取には

年々入替切手を以前妨右之取斗数年致来候処、近年下直ニて尚更右切手相増候、尤右之分ハ利分相渡候而年々入替取斗候て過分之俵数に相成申候、且又近年出米隙取、三ヶ年掛り候て出払候間、損米夥敷有之、右代自国元為積登可申候、行届不申候間、其分買戻し候而相仕舞来り候、右買戻代銀無御座候間、浜方其外へ買戻相願候て其代銀翌年元利返済致来候、右返済之節銀子及不足候に付、不得止看札外ニ売越候切手俵数代銀を以差引相立来申候、尤看札にて売払候節浜方其口々之直段当にて貰候者御座候間、数年来看札外ニ右之貰に売払来申候、其分ハ前件之通年々買戻之義相頼取妨来候処、昨年金銀不融通にて買戻行届不申候処、此節右切手を以屋敷へ取付候。其内には應對切手も其際相立不申、此節取付候切手都合廿七万俵余御座候間、早春より應對に相掛り様々申談候得共落合不申、初は新切手引替上端差出候相談有之候へとも、此節ニ相成候而は浜方其夫レも相止候て切手高都て銀子を以買戻候様申聞候、所詮右過分之高銀子手当行届可申様も無御座候、新米之方も應對切手御座候て新古には應對切手高百万俵余御座候、是迄ハ年々右之入替且買戻シを以相凌来候、此節一時に取付候間、所詮取

第17表 過米切手の内訳

申年米	
135,060俵	出米残り高
152,340	べり切手の内場売の分
287,400	計
- 46,320	内、山田屋・俵屋買戻分
241,080	当座取付分
〔内有米 15,000俵〕	
53,430	引当渡りべり切手の分
④ 294,510	申年米切手計
西年米	
286,980俵	2月出米切手高
① 内訳 { 133,860俵	看札出高
② { 153,120俵	追付分
③ 766,440	買持べり切手高
④+③+②=1,214,070俵	
有米高引	15,000俵
⑤ 差引	1,199,070俵
⑥ 外=①の内正米不足予想高	40,000俵
⑤+⑥=1,239,070俵	

妨も出来不申、役人中も極々恐入罷在候、右に付而は別紙之趣相達申上候而、新古共に出米差留候て応対切手に先キ／＼取調申度奉存候、右一件は時節到来候義ニ付致方も無御座候へ共何卒此上は程能相済候様之義、偏ニ御心添之程、重々何レモ奉頼入候、此段極内分御頼申上候^(一)

と、切手量が過大になった真相を或る程度伝えており、前にみた草間伊助の観測と符合する。借銀引当の入替切手が米価の低落で、新切手の乗換えに際し、利分を含めて余分の切手の発行を必要としたから、その量が累積したこと、また近年出米請求が少なかったから、三年越しの古米の損失が夥しく、その分買戻しを浜方其外へ依頼し、翌年その代銀の元利の支払いにも看札外の切手を充当したというのは、前節でみてきた手津正からの働らきを想起させる。此節取付けにあったのは古米廿七万俵（九万石）で、応対切手は新古米共で百万俵余と観測し、浜方の出米請求も真意

は蔵屋敷に切手を正銀で買戻させるためのデモストレーションであつたと思われる。

同時期に大坂の藩役人から江戸藩邸へ報告した過米切手の内訳は、第17表の通りである。

出米を前提としない借銀引当の応対切手は本来市場に出廻る筈がない「べり切手」と表現され、それらが契約違反で大量に混入したと弁明するものの、出切手の偽造が大量に行なわれたことは前にみた通りであり、「べり切手の内場売」と記され、市場へ流れてしまったと云われるものの中には、この偽造分が可成り

含まれていると推測されるが、申年分については出米請求不足高〓看札売分と応対切手の市場流出分を合わせて二八万七、四〇〇俵、うち浜方と蔵屋敷間の調停人となったと思われる山田屋、俵屋の両名の買戻分四万六、三二〇俵を差引くと、当面の取付額は二四万一、〇八〇俵、この他に借銀担保の切手が五万三、四三〇俵、申年米切手の総計は二九万四、五一〇俵となり、これに対して現実の在庫量は一万五〇〇〇俵に過ぎない。酉年米については二月現在の出切手は二八万六九八〇俵、うち一三万三、八六〇俵は看札出高とあるから、定格廻米高一三万俵には、該当する（申年分についても同様）。「追付分」は看札外の内証売と思われ、米切手の過半を占める。買持べり切手は、一見して返済不可能な七六万六千俵を超え、出切手と合して一二二万四千俵余、しかも酉年米の在庫はなく、申・酉両年分の過米切手は一・一九万九千俵余、更に看札に付された出切手の中にも正米不足予想高が四万俵も見込まれ、それを合すると過米切手総額は一二三万九千俵余、石に換算して実に四一万三千俵余となる。

如何に詭弁を弄そうとも、筑後蔵の応対切手が、市場に流通可能な出切手の形式をとった以上、銀主のうち返済の滞りに業を煮して市場で売払う者が現出することは予測し得るところであり、またそれが筑後蔵の債務履行義務の軽減につながったから、計画犯の疑いは濃厚である。すなわち

一切手締め之内より売出候類も、手津正杯は屋敷より為禿候同然之筋ニ有之候間、正米切手之外は都而入替に取斗候応対切手とは難申類も御座候、極々差詰候節は不埒を正助へ課せ候様成取斗ひも可有御座哉、此等之義は追々其砌に相成候て筋も付候相成可申候

一 一昨年共に看札面之分へ公辺へ相願レ、正実之売米に御座候、其余ハ御屋敷取斗ひ不埒之筋も有之、場売等申訳なき様にも御座候へ共、公辺御聞込之看札俵高を主に相立候へは、自然と其外之米は私之応対に落候様にも可相成哉、何もく無理ニ応待切手に押込候へ、一時に相破候相談出来不申共年賦相談位には落合も可致哉、左候へ

、又々冬ニ至事を起候様にも可致様に申談居候

とは、大坂蔵屋鋪より江戸留守居宛の書簡の一節である。⁽²⁾ 文意の読みとり難いところもあるが、手津正が蔵屋鋪の指図の下で調達切手の売出人となり、而もその上で過米切手を応対切手と強弁してしまえば、年賦償還の途が開かれよう⁽³⁾と見通し、最悪の事態に至れば、手津正に責任転嫁することが残された方法とされたのである。

なお、奉行所の訊問に対する蔵屋敷役人の答申では、出来滞りの理由として、文化九年の大坂廻米二步減令によって、例年より廻着高が減じたから、前年に渡しておいた応対切手の銀談が行届かず、已むを得ず翌年分の酉年新米の対応切手を渡しておいたところ、思いがけず翌十年は前年の半石を国許廻回、残半石廻米と制限が強化され、その上申年俵は悪米が多く、国許へ積戻して代りの追加廻米を申送ったが、同年は関東川々御手伝御普請を命じられ、更に藩主の初入部の入用が莫大であったため、追加廻米の手当が出来なかったとしている。もっとも文化九年の二步減廻米令は、御手伝普請御用勤めのため久留米藩は免除されたものの、国許の米が払底してその特権が行使できず、酉年新米を以って二步減分の廻送許可を江戸へ伺出ているが、申請のみに終ったらしい。また応対切手の増発については、大坂市中の御用金令による金融梗塞で、銀主が容易に新規の調達に應じてくれないので、已むなく採った措置であると弁明している。

過米切手を応対切手として処理してしまおうとする方針のもと、その額の軽減には、手津正・池田屋伊兵衛の買持分を切捨てゝる以外に方策がないことを検討した大坂藩役人の江戸藩邸宛の書簡は前にも一部引用したが、

追而得貴意候、爰元切手一件出訴に相成候上は凡百廿万俵の切手如何共筋合相立不申候而は不相済次第、兼而御相談申置候通には御座候得共、此節段々其取斗ひに押向候て申談見候處、入替切手は相手も御座候間、如何様共示談に相掛可申、過売立之方もの日々之入札に浜方々貴候義にて是も相手有之候間、無理にも示談に被相掛候得

共、福仲其外相頼候而場売取斗ひ候分ハ福島屋杯へおしかぶせ候事も出来不申、米屋（久留米藩掛屋米屋平右衛門——引用者）御仕送り杯へ昨年も切手相渡候間、売出させ候分も同然に御座候へ共、是ハ大身之面々に御座候間、押而買戻も出来不申、手津正、池伊其外浜方にて至テ懇意之面々相頼、御屋敷にて相手無之拵候切手為売払候分ハ公边に相成候節一向申訳も無御座、手津正、池伊には無理に引かぶせ候取斗ひも押而は出来可申候得共、其外ハ左様之事も相成不申候間、御屋敷へ引受候外無御座、引受候節ニ相成候ては空米を売出し候と同然にて、夫よりも御屋敷の所は重ク相当り候（中略）、右は此節切手内は成たけ筋不相立様取斗ひ、数月を送り候内、當時買入所持致居候者共限り之相手に相成候て、切手之出先きも吟味不相成様に取り無キ所にて数月を送候外有之間敷、右之趣与力中へも申談居申候（二月十八日付）⁽⁴⁾

とあり、切手の性格を吟味して明示することは不得策であるから、引延し戦術をとれば、そのうち切手の出先きも曖昧となり、取付けの額も減少することを期待している。

浜方からの出訴を受けて三月十日から内済示談にとりかゝり、三月二十七日「内済御声懸り」となったが、年賦償還額について調停が難航し、同年十一月に至って漸く示談が整った。「筑後規定書」と呼ばれる、この時の筑後蔵と浜方切手所持人との間で取極めた返済条件の規定書は長文に亘るので、それを要約した「浜方記録」⁽⁵⁾を引用すると

筑後蔵米切手出米滞一件

文化拾酉冬より米不足に可相成歟之噂有之、翌戌二月公訴に相成候高、新古に而凡七万石、其余年行司へ届に相成候分多分有之、調達之切手と出米切手と混雜に相成、都而四拾万石之切手高也、是は調達切手を売出し候者、手津屋庄助と云者、池田屋伊兵衛と云者有之、兩人出奔、夫故大騒動に相成、同年霜月に至内済に成、百石に付當時拾七石三斗三升三合三勺三才代銀を以相渡、同冬より本元百石に付四石三斗三升三合三才、元米之内へ請

取、年々残元米百石に付五石宛之利米書立置、元米皆済之上、又前法四石三斗余宛可相渡之趣に而内済相調、買保調達之口は当渡拾七石余之分不相渡、其余都而同法に而落合、委是一件記録有之と説明されている。

因みに手津正と組んで果した池田屋伊兵衛の役割の比重なり、その後の去就については詳かでないが、手津屋の出奔については大坂駐在の藩役人から国許への用状に次のように報じられている。

一手津屋正助義夥敷切手受持居候に付此節口々出訴にも可及旨蔽敷申掛候間、正助ハ御奉行所へ出候節も、御屋敷ハ決而不売出様被申付置候得共、無抛秋売出し候と申より外無之旨申候へ共、夫にては詰り御屋敷ハ利足不相渡所に至り候間、此義ハ屋敷ハ直に売出候切手致方も無之旨申聞候処、左様に候へ、何もく私引かぶり可申旨に付、都而正助へ引かぶせ候由、尤御屋敷役人引受可申処に候得共、夫にては切手ハ屋敷之品に相成候間、無抛正助へかぶせ候由、此節之義ハ格別之忠節之趣、重々正助へも申聞置候由、右に付而ハ先月廿九日飛船ハ正助罷下り候由

一右之通に候へは応対切手先キ名前書出し、正助も其内に加へ候へは、只今にても済候へ共、正助斗切手高多候故不均合にも可有之候、同人外レ候義、浜方へも追々聞へ候ハ、とても御屋敷ハ正助へ万事引かぶせ可申候間、御屋敷と相对不相成ト心得、自然と内済に相成筋も可有之候、右之通に成行候はゞ、又一兩年もいたし候ハ、正助罷出候而商売筋何ぞ支も有之間敷、尤とふて名前書出に相成候上ハ吟味相掛り候ハ、正助ハ御城内へなり共御構ひ御かばひ被成候て可然旨、夫程迄御吟味御座候義ハ有之間敷由也（三月二日付）⁽⁶⁾

文中、利払い不履行で手津正が応対切手を市場へ売払ったとする供述は、先にも観察した通り結局蔵屋敷の責任となるという認識が存在したことが窺えるが、手津屋を出奔させ、十一月迄引延し戦術をとった挙句の決着は余り効果

第18表 文化12年5月予算書の内、大阪年賦返済額

A	53,870俵	申酉兩年米切手浜方取引分 320,890石、応対切手 93,470石、 都合 414,330石年々渡分
B	2,032	西夏大豆切手浜方取引分 14,930石、応対切手 700石
C	3,740	申年酉年応対切手年々渡・戌年分之内渡残分
計	59,642	(19,880石667)

有馬文要「御旧制調書」十一、「久留米小史」巻七に収録)

第19表 筑後蔵空米切手返済規定

$414,330\text{石} \times 0.17333 = 71,815\text{石}819 \cdots$ 当年代銀払
 $414,330\text{石} \times 0.82667 = 342,514.181 \cdots$ 当年の20年賦
 $414,330\text{石} \times 0.04333 = 17,954\text{石}162 \cdots$ 1カ年返済額
 $17954\text{石}162 \times 20\text{年} = 359,083\text{石}324 \cdots$ 20カ年完済額
 $359,083\text{石}324 - 342,514.181 = 16,569\text{石}143$ 元米超過分

超過分 16,569石143は百石に付4石 ($414,330\text{石} \times 0.04 = 16,573\text{石}2$) の割、此分利足に組入れ、利息は明12年の19カ年積置、元石完済後百石に付5石の割で9カ年賦渡し

はなかったように見受けられる。すなわち示談条件を成文化した「筑後規定書」は二〇カ年賦の返済条件を百石単位で規定しており、切手総数を明示していないところに、筑後蔵の意図的なものを感じさせるが、返済初年度の当年は総石の一七・三三%を代銀渡し、残石八二・六七%分を当年から二〇カ年賦(天保四年まで)とし、年々元石の四・三三%宛返済、利足は明十二年から十九年間元石の五%とし、年賦銀の超過分(百石に付四石)を積立て置、年賦完済の翌年から九年間百石につき五石の割で支払うと規定している。翌十二年五月に作成された久留米藩予算書の「御三ヶ所本高御積」には、京大坂御入用の七万五六一八俵のうち、五万九六四二俵が大坂空米切手の返済分に予定され(第18表、Aのみが出訴の対象分と見做すと、空米切手総額は四一万四三三〇石で年賦米は五万三八七〇俵(一七・九五六石余)となっている。この数字を返済規定で計算すると、ほぼ合致しており(第19表)、藩が意図した手津正出奔の実効は認められない。なお、従前十三万俵を定格とした大坂廻米は、

十二年倍增の二六万俵を予算化⁽⁸⁾している。この増加分にはそれまで手津正が扱ってきた通り付分の六万俵が含まれて
いるであろうと推測されるのである。

注

(1) 「林田正助詳伝」一四六―七頁。筆者はこの有馬織部の「手記」の原本を採訪のため久留米市へ赴いたが、現地の方々の熱心な協力にも拘わらず、所在が確認できなかった。已むを得ず伊奈氏の引用史料に依拠したが、若干印刷ミスの故か意味不明の箇所があり、引用中ママを付してある。

(2) 大坂蔵屋敷馬場七兵衛・岡田源右衛門(岡田弾右衛門カー引用者)より江戸御留守居役稻次半兵衛・吉見弥三右衛門宛書簡(「林田正助詳伝」一五一頁)。

(3) 二月二七日付篠田源之丞陳情書(同書一五二―三頁)

(4) 同前書一五三―四頁

(5) 「近世社会経済叢書」第二巻、三三二頁

(6) 馬場・岡田両名差出(「林田正助詳伝」一五七頁)。なお大坂退去後の手津屋正助の動静については、戸田幹編「久留米小史」(巻之廿二、一四―一六丁)の「林田寛道」の項に「(文化)十年金五千兩ヲ献ス、若津港ニ米廩ヲ建築シ久留米通町四丁目及ヒ田主丸町兩所ニ壮大ノ家屋ヲ建築セリ、其構造ノ壮輪奐ノ美久留米市街中曾テ之レ

ナキ壯觀ナリ、文政二年大給五艘若津米廩及ヒ通町四丁目家屋倉庫売物百三十七貫目共ニ献ス、四年正月十一日切手三百七拾七貫目調達分目録ヲ以テ献ス、大衆公数々其家ニ臨マル、六年十月九日歿ス、年六十一、寛道為人身幹短小ニシテ膽略アリ、其商法ノ計画ニ至リテハ人口ニ膾炙スルモノ多シ、宜哉一世ニシテ素封ヲ致セシ事、寛道男子幼ナルヲ以テ親族道高ヲ養ヒ嗣トス、又五郎ト称ス、道高モ亦金貳千兩ヲ献ス、郷士籍ニ署シ月俸十人口ヲ賜フ(下略)」と伝えており、久留米藩「御書出之類」(「藩法集」三七―七)にも、文政八年八月二十一日、田主丸町大庄屋格林田源助(正助の養嗣子)へ対し、親正助代以来御勝手方御用向出精を賞して浪人格を被仰付是迄の拾人扶持も継続して与うる旨の御書付が見出される。

(7) 「草間伊助筆記」巻六(「大阪市史」第五巻、九六五―九頁)

(8) 「御旧制調書」十一(久留米市民図書館蔵「有馬家文庫」)

おわりに

正徳の税制改革によって、すでに限界に達していた本租に加えて、全国でも有数の菜種生産を対象とする夏物成の増徴を計画して失敗に終った久留米藩の財政は、省減令・家中への上知令・銀札の発行、領内への調達銀・小間割銀の賦課等で糊塗しながら、破局的状态へ加速していった。寛政三年、堂島における筑波蔵の出来延滞事件を契機として、翌四年以降大坂廻米量の下限を一三万俵と定めたが、それは過米切手発行の準備米として機能したに過ぎなかったと思われる。前にみた寛政期の予算書が、大坂廻米の販売代価を銀方収入に算入しないことの根拠を、ここに見出したと思うのである。

このことは久留米藩に限らず、隣藩の福岡藩の文化末年の予算書からも窺うことができる。支藩を含め黒田五二万石と称される福岡藩の元禄期の内検高は五五万石余、廃藩置県時五七万石と報告されているが、久留米藩同様、財政の窮乏は早い時期から始まっており、貢租の増徴は享保・元文期に限界に達していたと云われる。第20表の文化一四年九月から文政元年八月迄の「一季御国財御積目録」によると、米建・銀建双方の収支不足を米高に換算すると三万九、五六八俵とされている。該史料を紹介されている「物語藩史」の著者は、上記三万九、五六〇俵の不足は同年だけの現象ではなく、年々の指引不足は御借銀の累積となる一方で、「同年の藩債の未償還額は三万⁽¹⁾、一三五貫余に達し、黒田五二万石の表高を三カ年投げ出して追付けない額となっていた」と説明されている。因みに堂島四蔵の一として筑前米の大坂廻送量は定格二四万俵（八万石）とされているが、該予算書の米建の部には「大坂廻米」なる費目はなく、当然換金化を必要とする参覲、江戸・京大坂費用に「御借銀扱米」を合計すると二四万七千俵となり、定格廻米高と略合致する。そしてこの場合にも銀建部門の収入の部には「大坂登せ大豆代銀」と「諸上納銀」の二口が計上されるのみであって、大坂廻米の販売代価が収入として加算されないのである。

第20表

福岡藩 文化14年9月 文政元年8月 一季御国財御積目録

	田高	450,821.石703合余
	畠高	101,061.石597合余
米	収 入	
	俵 合	
	本 田 所 務	646,235.477
	米 稻 作 所 務	20,963.040
	倉 作 所 務	20,370.179
	諸 納 米	107,010.028
	計	794,578.324
	支 出	
	給 知 渡 分	277,410.214
	切 扶 渡 分	165,616.304
	計	443,026.544
	荒引徳引其他	42,207.234
	寅10月渡扶持米	10,734.135
	長崎御用諸口	71,363.043
	御参勤費用	40,500.000
	江戸費用	98,323.080
	御借銀扱米	95,000.000
	京・大坂費用	13,180.132
	計	371,308.294
銀	差引不足米	19,757俵193合 ㊤
	収 入	
	大坂登せ大豆代銀	435,255.2
	諸 上 納 銀	717,801.1
	計	1,153,056.3
	支 出	
	御用所御入方銀	621,058.6
	長崎御入方銀	185,001.7
	御席臨時分	100,000.0
	定 格 渡 分	374,237.4
建	臨時御作事	202,942.2
	計	1,483,238.9
	差引不足銀	330,182.6
	(石50匁替米に換算)	19,811俵005合 ㊦
㊤+㊦ 惣不足		39,568俵198合

『新編物語藩史』第11巻 p137より

ここに見られる西国大名の大坂廻米は、従来指摘されている「飢餓移出」論を補強するものに他ならず、国許その他各地と大坂の米価の見競いによる廻米量調節の余地は有り得べくもなかったと思われる（このことは前にみた手津正の大坂における筑前古米の買入れによる国許廻送の事例も想起されたい）。

もっとも、福岡藩の予算書が直ちに同藩の大坂廻米を過米切手の準備米とする決め手にはならないが、市場に流通性のない坊主切手による「証文借り」が困難になった段階で、出切手による借銀が始まり、元利の返済にも出切手による差引が行なわれるようになったのは諸藩共通の事態であったと手津正は次のように述べている。

先年、諸家様御一統御差支被遊候由之所、凡二十ヶ年此方は大坂ニ而諸家様方御証文ニ而は御才覚御出来かね被遊候御儀ニ付、諸家様御一統御切手ニ而御才覚ニ相成候由之所、誠二十ヶ年も相立候得は四五倍増ニ相成、高

歩之日合ニ付利息昼夜相掛候義ニ付、迎も元利高金之御返下御出来かね被遊候御義ニ付無余儀御切手ニ而御徳世被遊度（文化十一年五月口上書）⁽³⁾

出切手による諸家の借銀が顕著になった時期を二〇年以前の寛政期と見做している。ただし、これは自藩の寛政三年の出来滞り事件が念頭にあっての観測と思われる。蔵屋敷と債権者間の「応対切手」の授受は、一応市場に流出しないことを前提とする「封印付」であつたとは云え、出切手の体裁をとる以上、債務不履行の際には債権者が市場で売却可能性が潜在していたと思われる。比較的前い事例としては、森泰博氏が紹介されている元文二年六月の広島蔵の場合、質米切手が夥しく市場に流れてしまい、切手数に対し在庫米は三分位で浜方が騒ぎ立てたため、蔵屋敷役人は藩の重役へ対し早急に国許より登米の手当をし、蔵の信用維持を図る必要があることを進言し、国元扶持米等不足の節は大坂において他国米を購入して差下すことを提案、早急にこの手当が行なわれなければ、当秋の新米売捌きが手狭まとなり、「至極之御差問」と、過米切手・先売切手の発行が困難となることが指摘されている。⁽⁴⁾

従つて、「応対切手」以外に蔵米の看札売りの段階で、或る程度の過米切手を含んでいたことは諸蔵に於て珍しいことではなく、旧稿でみた肥後蔵の明和期の蔵米販売は、同藩の宝暦改革で蔵元に起用された入替両替加嶋屋による過米切手買戻資金の遣り繰りに関する周回な手当てをベースとするものであつた。そこで加嶋屋がとつた手法は、浜方の有力な入替両替による買持と、比較的低价かつ長期年賦の借入れが容易な浜方先納によつて操作されていた。⁽⁵⁾

御改法前年御切手五万石斗り之所、御用聞中ぶも浜方御館入中ぶ別段右高之内、纔千石も受持申上候は無之候故に、浜方江御売捨被遊候節は御買戻之節、辰年時分之様ニ百五匁ニも御買戻相成候様之儀、又々有之候節ニは一⁽⁶⁾向被遊方も無之趣

と、久留米藩御改法の文化六年から当面十カ年を目途に始まつた手津正起用の背景には、当時御用聞、浜方館入中か

ら相手にされない程、筑後蔵の信用低下があった。

財政顧問の役割をも果すべき有力な蔵元・掛屋が得られなかった筑後蔵が採らざるを得なかった途は、自領の御用投機商人との結託による切手商売であった。手津正が従来「浜方へ御売捨」の五万石の買持を担当したのは「毎年出産の御米八万石は拾万石も鑑札ニ御出し御売被遊候御儀」につき、「又五万石も御売増御出来兼」⁽⁷⁾「ねたからであった。もっとも看札売りの段階で二五%増の過米切手が含まれるという数量的根拠に裏付けはないが、それ以外に発行される過米切手のうち、五万石分を藩が手津屋名儀で買持つというのが真相である。従って自蔵の米切手については、本来買持資金を必要としないが、廻米の一部(六万俵)を「通付米」と名付け、納屋米として手津屋に売らせ、その代銀を入替阿替からの借入の鋪銀に当て、自己買持分と同量の四蔵物切手の買持ち資金に充てる。切手の買戻しは必ずしも追出し期限の迫ったものに限らず、相場の高下、流通量の調節を勘案して行なわれた。自蔵の切手と同量の他蔵切手(抱合米)の買持が行なわれたのは、自蔵切手買持のカモフラージュの意味合いを含むと推測される。

このようにして行なわれた切手買持ちの目的はいうまでもなく値上りへの期待である。この期待は専ら他蔵の抱合米にかけられているが、それはノーマルな米相場の騰貴ではなくて、他蔵の切手買戻しによる暴利を期待した、ギャンブル性の濃いものであったことに注目すべきである。そのことは、繰り返し述べるように量の多寡に差はあれ、過米切手の発行が当時諸蔵共通の事象であったことの例証でもある。文化九年六月四日の手津屋願書に

(文化七年)

午ノ九月時分、私御国元江罷下り候前ニ、午年抱合米筑前古米五万八千四百石、肥後古米貳万貳千六百石、肥前

古米壹万六千六百石、合九万七千六百石高御米抱合米有之由所、例年霜月ノ正月二月迄ニ追々新米ニ仕替候得共、午ノ秋ノ御買米之含ミ申立、新米は古米ノ五、六匁も高直ニ有之故、何分新米ニ仕替難申義は、例年新米ノ古米は五、六匁高直ニ而新米仕替候儀前角ノ仕来リニ御座候処、何分御買米之含ミ而行戻リニ壹石ニ付拾匁余も新米

古米之仕替不勘定ニ御座候間、此段御下代中様方江御内談申上、^(未カ)午ノ春ニ相成候へ、筑前古米并肥前古米共ニ、はた売之連中が買戻シ可申、第一は筑前御屋鋪、肥前御屋敷も御買戻可有之、旁以当冬之処抱合米を新米ニ仕替候儀ハ大不調法ニ相当リ候段、御下代中様江も問屋中江も申入候処、米喜坏は別而新米ニ仕替候儀は差留候、旁午ノ冬ニは新米ニ仕替不申候趣、私問屋中ニ申入置候而、私義は九月中旬が御国元江下リ、惣而極月差入ニ罷登リ、翌未春迄見送り候処、去秋推察之通筑前古米はた売仕候不実連中が追々買戻し候故、筑前古米老石ニ付七拾目が百拾匁位迄貳万五千五百四拾石高、浜方がはた売連中が買戻し候儀ニ付、右ニ而正銀六百三拾九貫貳百七拾七匁御益ニ相成候内が境屋善六方が寛政十一未十一月式拾五貫目御借用被遊候証文面、同人はた売之掛合ニ而押はめ候ニ付、此段木村様江も御親申上、極々無抛右高御返下シ分ニ相成、指引残六百拾四貫貳百七拾七匁筑前古米貳万五千五百四拾石分之御益ニ相成、猶亦右高引残り筑前古米三万六千八百石余、右之内七步通り蔵出仕候得共、筑前御屋鋪が慥ニ壹万石余は御買戻シ相成候儀を見込、追々蔵出仕候処、見込は違不申候得共、残念之儀は鴻池本家が筑前古米マサカ之時分用心ニ壹万石余リ囲置候分を筑前御屋鋪江相納申上候由ニ而、其切手ヲ鴻庄が私方江相渡候故、御買戻ニ不及相済、甚残念ニ奉存候⁽⁸⁾

福岡藩の財政が當時火の車であったことは前に見た通りであり、この時の過米切手は、江戸十組の大量の買付注文に誘発されたという特殊事情が加味されると思われるが、⁽⁹⁾浜方の相場師にとっては絶好のチャンス到来と歓迎される事態であり、久留米藩の古借の償却に役立っている。而も筑前蔵の場合、それが蔵出延滞事件に繋がらず、堂島四蔵の一として信用を博していたのは、鴻池のような有力な蔵元が控えていて、現物の準備米を用意して過米切手の処理に抜かりがなかったからである。上引の史料はつづけて

肥前古米之儀、大坂御役頭様御見聞被遊被下候通、去春八拾六匁が内証ニ而百拾八匁迄御買戻シ有之候得共、未

二月十五日、肥前御藏ニ古米無之相成、夫々御横ニ御成被成、委細は御屋鋪御役頭様御見聞被遊被下候通之成行ニ相成、甚以残念之儀は去春之言合相場肥前古米八拾六匁ニノ六百貫目斗りは御国御屋鋪之御益ニ相成候管之処、未二月十五日、未九月二日迄貳百四十日余相掛り御公辺御沙汰ニ相成、何ニも相成不申段重々残念ニ奉存候。

と、文化八年の肥前藏の古米の買戻しを予期した手津正の買持は、「御横に御成被成」とは面白い形容であるが、同藏が出来を断り公訴に持ち込んだため、反って損失を蒙る結果になったと思われる。蔵屋敷としては高価な買戻しに応ずるよりも、外聞は悪いが公訴を受け、幕府の調停によって示談に持ち込む途が破局を避けるための残された途であつたのであり、筑後藏の寛政三年・文化十一年の出訴事件も、これと同一の線上で扱えられる。

肥前藏の場合、文化十一年の筑後藏の出訴事件直後、再び凡二〇万石程の過米切手による派方騒動を惹き起しており、⁽¹⁰⁾後藏同様この種の常習犯という印象が濃い。長野遍氏の「宝暦・安政期の佐賀藩財政の分析」によると、同時期の佐賀藩の「大目安」には、年貢米に対し売出米の量が超過し、「不足米」として扱えられているが、その量はコンスタントなものではなく、年によって可成り異同があり、⁽¹¹⁾売米量に対する年貢米量は明和中期から天明中期に六九%、文化中期から文政中期に五七%という数字が報告されている。確かな傍証史料を欠くが、長野氏の云われる年貢米の超過売米とは、肥前藏による過米切手発行に他ならないと思われる。更に長野氏によると、「売米が年貢米以上であるため、年貢米量の超過部分は買入れによつた」とされ、文化十年の買入米は九万九、〇二九石で銀六、六四四貫（石当り六七匁〇九一筆者計算、以下同）、文化十一年五万一、七三三石で銀六、六三三貫（石二八匁一二）、十二年六万、三二一石で銀五、二九六貫（石八八匁〇七）を要したことが報告されている。⁽¹²⁾この買入米も石当り単価が異常に高いことから過米切手の買戻しと判断せざるを得ない。

幕府の禁令にも拘わらず、このような過米切手が市場に横行し得る条件の一つが、幕府の禁制故に已むを得ず、蔵屋敷が過米切手の高額買戻しすることを期待する相場師の存在があり、筑後藏の代行人としての手津正もその一例で

あった。

ところで、手津正が堂島において仲買株を有せず、切手の買持・買戻しには仲買を通して行なわれたわけであるが、そのために要する資金として

譬五万石も受持申上候得は大坂出店蔵ニ年中俵物之五千石位イ別段正銀之百ノ目も備へ置不申候而は決而御米五万石買持出来不仕候義ニ御座候（中略）、御米五万石買持申上候得は抱合米五万石入用仕候ニ付、双方合拾万石、此代銀凡五千五百ノ目ニノ、五節季毎ニ日合阿替方へ差入不申候而は決而相済不申義ニ付、右高ニ而一逢ニ銀八九拾ノ目充之日合、一逢毎ニ日合差出候義ニ付年中大坂出店ニ銀三四百貫目位イ之手当は相囲置不申候而は御米五万石之買持仕候事難相成段、乍恐御察被遊被下様奉願上候、且又折ニより相場下落之節、譬石ニ付老ヌ引下ケ申候得は拾万石ニ而ハ追鋪銀百貫目差入不申候而ハ阿替方承知不仕候義、此阿三年之所は買持買戻し双方ニ而ハ抱合米共ニ貳拾万石余ニ相成候所、石ニ付老ヌ引下ケ候得は貳百貫目日々追敷銀入用仕候義、此節之様ニ百年目之大下落之節ニ行当り候時は新米類ニ而老石ニ付六匁余引下ケ、古米類は老石ニ付貳拾目余も引下ケ候ニ付、此節は千五百貫目も貳千貫目も入用仕候義ニ而誠ニ百年目之大難渋年ニ奉恐入候、⁽¹³⁾

と、手津正は入替日歩の負担、買持期間中の値下り時に入替商へ差入れる追敷銀の負担の重圧について述べている。

ここで、五万石の買持に五千石の準備米が必要であるといっている数量的根拠は定かではない。諸蔵の発行する過米切手に対して、当面不渡りとならないだけの準備米の限度をどの程度とするかは明らかではない。余り適切な史料とは云えないが、『大阪商業史資料』に収録されている文化十三年の越年米高の数字の後段に⁽¹⁴⁾

^(文化)
一同十三年 百六十三万俵

右越年米平均十ヶ年

二百五拾万俵余

但三ツ物二ツ物入交

右石高九拾万石余

右三步一 自分手銀買

三步二 入替に可相成

と注記されており、蔵屋敷の看札売りによる出切手量の三分の二は、直ちに現米の蔵出請求されることなく、入替に差入れられるというのも、若干のヒントになり得るのではなからうか。従来「入替両替」についての説明によく引用される次の一節に、

入替両替といふは小手前の者には中々出来ぬ事にて、鴻池屋善右衛門・辰巳屋久左衛門杯のたぐひ、格別富豪の者のすることぞ、米仲買ども、右の切手を段々と質物に入れおもわく次第、いか程も買ふ事なれども、米切手は蔵米の有高だけのもの故、凡の数も知れべき訳なれども、譬へば有米拾万石の米切手、市場にては百万にも二百万にも成る訳は、右の入替両替へ質物に取り置きし切手を銘々のおもわく次第にて米市場に持ち出し売り払ひ、置主より受戻しに来れば市場にて切手を買ひ取りて戻すよし、此扱方にて入替両替多分の利徳を得る事とぞ、故に封印附の切手（応対切手のこと―引用者）は質にとらざる極のよし⁽¹⁵⁾

とあるのは、必ずしも文意を得難いけれども、手津正のような投機商を含めて、堂島の市場取引の背景に、最大の金融業者が営んでいた入替両替という、堂島特有の業務の存在が大きな位置を占めていたのである。

入替両替は、旧稿にも触れた通り、堂島での米の信用取引のための機関であった米方両替（『遺縁両替』）とは別個のものであって、大名金融の一変形であった。それは踏み倒しや焦げ付きによって、単純な形での大名貸が不可能に

なった段階で、大名の借入れが過米切手の発行に主として依存するようになったのに照応して展開した、新しい金融業務であった。正米出切手を担保とし、堂島仲買のみならず、一般投資家にも、米切手取引のための中・長期の貸出を行なうのが、その営業の主眼であった（傍ら自らも米切手の売買を営んだが）。信用取引でないにも拘らず、取引先から一定の保証金（敷銀）を受取り、期限ごとに担保物件の時価が低下していれば保証金の追加を求めることが規定されており、一定率の利子を取得することは勿論である。追加保証金や利子の納入が滞れば、担保物件を処理することも合法とされた。それは米相場の変動と拘りなく利息を取得し得ると同時に、大名相手の取立のような困難を伴わない、豊富な貨幣を所有する金融業者にとっては、有利で安全な貸付法と見做されたと思われる。⁽¹⁶⁾

このような入替業は、大名が過米切手を常時発行することによって有利な条件を得るものであったと同時に、有力な入替業の存在が過米切手の大量発行を可能にする条件ともなったのである。すなわち、過米切手が一時に市場に廻ることによって生じるであろう現物の蔵出米の不足・不渡切手の発生は、入替両替の貸出金による切手買持——値上り待ちの、また買持米令に應えるための——によって防止されるので、超過発行の量を増大させることが可能であったからである。

過米切手による金繰りを年々継続するためには大名は適度の買戻しを繰り返すことが必要であり、それを操作することが恐らく蔵元・掛屋の重要な役割であったと思われる。

嘗て筆者は、享保期の堂島における帳合米取引公認の前段階で、幕府が江戸町人を派しての堂島の掌握を企図して失敗した経緯を考察したことがある。⁽¹⁷⁾幕府権力の重要な基盤の一として中央都市の直轄所有が指摘されているものの、堂島の米価が諸藩の大坂廻米の多寡に規制され、幕府自身米価の権を掌握するものではなかったことを指摘した。

幕藩国家の最高主権者として、大坂における領主米の市中流通量（米切手）の調節に直接介入したのは越年米の激増が顕著になり出した享保一五年二月のことである。同年江戸・大坂に於て幕府自身による買上米が実施され、翌十六年五月に作成された「戌年御払方御勘定帳」には、江戸・大坂御買上米に要した額として金五万七、六〇三兩（六〇目替で銀にして三四五六貫一八〇目）、銀一、三一五貫八〇〇目とあり、金方が江戸買上分、銀方が大坂買上分と仮定すると、両地の買上米代の振合は江戸七二・四％、大坂二七・六％となる。また銀方分を一五年の終相場中国米石当り二三匁で換算すると、五万七千石余が大坂における買上米の規模であったかと推算される。翌十六年以後文化一〇年迄に、供給過剰による米価安のは正策として、大凡六〇万石をメドに大坂市中に発せられた買米・囲米令及び買持米資金調達のための御用金令は、文化十年を除き、主として米切手による買持であったため、むしろ諸蔵の過米切手発行を助長する結果となり、米価の引立てに何の実効も得られなかったことは、「草間伊助筆記」の叙述に繰り返されている。

すなわち、買米令初発の享保一六年、四月に市中の有米高調査のあと、市中有徳町人へ対し「米ニ而成共、切手成共勝手次第」と命じた買米は、買持切手の明細を届出ることを義務づけている。更に同年十月大坂市中六百余町に分担させた買米は、市中に出廻っている古米切手を対象とし、買取切手は商用として転売することなく、蔵出して飯米として費消することを督励し、一方で諸蔵の蔵出しの滞りを監視するなど、間接的に諸蔵の過米切手一掃を意図しているように思われるが、一面では米切手買入に必要な資金調達のための米切手入替を奨励し、六〇万石と云われる同年の買米は、その殆んどが米切手によるものであったと思われる。同年の越年米は前年の倍増の一九二万俵、年末の中国米相場は四六匁となっている。翌十七年七・八月の西国地方の蝗害による大飢饉で米価は騰貴したが、十八年以降再び三〇匁台に低落した。幕府は享保二十年十月公定米価を布令すると共に、諸蔵屋敷に対し、蔵米売払い毎に米

高・米直段・落札人について巨細に届出ることを命じ、買請人に対しても同様の届出を義務づけ、諸蔵の過米切手発行を抑制する方策をとっている。傍ら同年十一月正米并米切手の入質を奨励、十二月には当地の大和屋三郎左衛門・泉屋吉左衛門・平野屋五兵衛・辰巳屋久左衛門の四名へ銀三、二〇〇貫目を貸下げ、質米入替資金とするなど、公定米価施行による堂島の景気沈滞へのテコ入れが行なわれている。

以後、大坂市中へ発せられた延享元年の買米令、宝暦十一年の御用金令、寛政年中の囲米令、文化三年、同七年の買米令は、何れも納屋米を除外し、専ら蔵米を対象としたところに特色があり、憶測の域を出ないが、過米切手の凍結策と見られないこともない。享保二十年の諸蔵に命じた払米の申告が同年限りのものであったかどうかは明らかではないが、延享元年の買米令の際には蔵屋敷の払米落札の明細の届出を米方年行司へ命じており、過米切手の流通量を抑制する一方、幕府は宝暦十一年空米切手の禁を再確認すると共に、明和二年以降正米切手の通用を円滑にするため、公事出入中や關所の際にも米切手を封外とする等、米切手の保護策を打出したことは周知の事実である。明和四年閏九月調達切手の売買を禁じ、その市中へ流出することを防止すると共に、違反者は処罰することを触出した。そして安永二年の官銀入替令は諸蔵の蔵出し延滞による紛議が少くなかったことを示すものと理解される。この官銀入替令に代って登場した天明二年九月に発令された呉服師後藤縫殿助による米切手改印制は、公儀による米切手統制を半官半民的機関による内済示談方式への移行と捉えることができよう。この後藤による米切手改印制は過米切手の操作によって支えられている諸蔵の蔵米販売にとって不自由極まりない掣肘であり、笠谷和比古氏が紹介されている通り諸藩蔵屋敷の留主居の連合による仕法撤回運動が展開された¹⁹⁾。そしてこの改印制によって諸蔵の米切手発行を実米の裏付けのあるものに限定しようとする意図とは裏腹に、天明二年十二月十五日の町触には、後藤による米切手出入の調停に関し、

第21表 寛政～文化年間越年米高

年次	千俵	年次	千俵
寛政 3	2,007	享和 3	2,360
" 4	1,148	文化 1	2,289
" 5	1,780	" 2	2,233
" 6	1,800	" 3	2,608 ①
" 7	2,035	" 4	2,791
" 8	1,610	" 5	2,291
" 9	1,476	" 6	2,237
" 10	1,899	" 7	2,883 ②
" 11	1,487	" 8	3,425
" 12	1,845	" 9	3,166 ③
享和 1	2,289	" 10	2,015 ④
" 2	1,165	" 11	1,194

① 11月買米令

② 10月廻米二歩減令

③ 11月買米令

④ 10月廻米四歩減令

一縫殿助取扱ニ而相済候引当米切手之分、何年米と印いたし、致加印候ニ付、右切手之分へたとへ翌年米之切手ニ而も正米ニ相立、正米切手同様ニ諸向致通用、右加印無之切手ハ金銀引当ニ而空米同事ニ切手故、正米同様ニ通用致間敷候（傍点引用者）

と過米切手に転化する可能性が濃厚な切手の先売りは是認する文言が挿入されているのであり、諸蔵の米切手発行の内情に関する幕府の現状認識が窺えるように思われる。

更に幕府が出切手による借銀を是認する含みを持った指令文言は、凶作年の天明四年二月米の買占の取締りを徹底するため、入替兩替へ預り米切手の書上げを命じた際、先納切手と「正米切手にても貸付銀之引当ニ取置、利付証文等有之分は右断ニ不及」と見え、過米切手増大の傾向は抑止し得べくもなかった。

しかも幕府が採った正米切手の保護策は、寛政期以降顯著となった大坂市中の商況不振によってだぶついた金融業者の資金を、安全かつ有利な投資対象として米切手の入替融資に向わせたため、文化年間（20）の買米令の施行との相乗作用によって、同時期の過米切手の増大を促進させ、越年米の異常な膨張に連なると推測される（第21表）。

因みに、全国米価の先導性を評価される堂島の米価が、このような過米切手を含んだ越年米によって形成されることの意味を、どのように解釈するかは今後の課題である。堂島米会所で月々公表される米勘定を歴年に亘って確かめることはできないが、公刊されている

た「古今八木相場帳」「八木相場追考」や、江州湖東の在村商人の相場日記などによって、享保九年以降の堂島米勘定をみると、諸蔵の公式の切手発行高である売米高（過米切手を含む）のほか、内証売・延売・返米引・出米立等と表示された俵数が散見され、それらの内容は必ずしも明瞭ではないが、堂島関係者が諸蔵の過売りの事実を認識していたことを示している。すなわち宝暦十一年空米切手禁止発令の前年、宝暦十年に、幕府が過米切手の買戻しを肥後蔵初め九蔵に命じていることは旧稿で紹介しているが、同年の米勘定を記した「古今八木相場帳」には、「中国買戻五万俵、是出米成_レ躰、二十七万六千俵諸蔵買戻、右同断_{（傍点引用者）}とあって、⁽²¹⁾過米切手発行の事後策として諸蔵が行なう買戻しは、出米勘定として処理されることで、堂島の米勘定が成り立ち、許容されるものであった。云い換えれば、過米切手の発行があっても、コンスタントな買戻しの措置がとられていれば、堂島市場の破綻はなかったということであり、前にも指摘したように、それが諸蔵にとって入替両替を営む（若しくは融資する）有能な蔵元の職責でもあった。

ここにみられる堂島市場の在り方は、既に純粋な経済活動としての場としては抱えられない。堂島の正米取引が現物米と遊離した擬制的な商品取引市場として展開し、それが大名領主経済を持続するために必要な機関であることを認定している故に、幕府は堂島の繁栄を庇護し、永続させる必要があった（文化十年九月、幕府は入替両替へ金苞一万両を貸下しているのは、その裏付けである）。

文化九年幕府が発した江戸・大坂への諸藩廻米式步減令と、従来の大坂市中における切手囲いによる買米を、正米囲い若しくは代銀上納に切り換え、更に翌十年採られた前年を基準とした半石廻米・半石国許廻米の強制、そして大坂河口に廻米検査所を設けて廻着石数の厳重な監視体制を採るに至らしめた背景には、筑後蔵・肥前蔵に代表される買戻しを伴わない過度の過米切手の流通に伴なう堂島市場の破綻をくい止めるための措置であったと思われる。

しかも限度を超えた米切手の過振りによる大名経済の破局を救う途は、浜方の公訴に対して、幕府自身が蔵屋敷へ強権を発動することなく、示談を調停し、蔵屋敷の返済不可能な巨額の負債を「徳政」とも形容され、踏み倒しに類似した低利かつ長期年賦の償却に持ち込むことであった。⁽²²⁾

文化十一年の筑後蔵空米切手事件は、堂島の実力者入替両替乃至有力な蔵元を擁し得なかった故に破綻を来した蔵屋敷の一例であり、当時諸藩蔵屋敷共通の蔵米販売の実態がオーバー・ヒートした事件として把握されるのではなからうか。

注

- (1) 「新編物語藩史」第十一卷所収の井上忠・安川嚴「福岡藩」一二五頁、一三六―七頁
- (2) 同右、一三九頁
- (3) 鶴久二郎氏所蔵、林田家文書
- (4) 森泰博「大名金融史論」一七九―一八一頁
- (5) 拙稿「一八世紀以降の大名金融市場としての堂島」『史料館研究紀要』第二号。なお島本得一氏は浜方先納には出切手が担保とされたと推測されている（『徳川時代の証券市場の研究』一五頁）が、加嶋屋長田家に残された浜方先納の担保は大半が坊主切手である。
- (6) 文化九年六月四日手津屋口上書（林田家文書一二六）
- (7)(8) 同右
- (9) 同願書中には、文化八年春、肥後蔵でも一石につき一三五匁迄もの直段で切手の買戻しが行なわれたことに触れており、十組の買付当時建物米であった肥後蔵も筑前蔵と同様の事情であったと思われる。
- (10) 「草間伊助筆記」『大阪市史』第五卷、九六二頁
- (11) 長野通「幕藩制社会の財政構造」三八七―八頁
- (12) 同右、四一二頁
- (13) 文化九年五月六日手津屋口上書（林田家文書六九六）
- (14) 「大阪商業史資料」第二十卷、一七四丁
- (15) 「難波の書」（島本得一「堂島米会所文献集」所収）
- (16) 大名貸や米相場の投機性を忌避する体質で知られる三井でも、文化年間の大坂両替店では、米切手入替による利足収入が総利益の二〇・四―二七・〇%と高収益を挙げているが、文化十年前後の空米事件による莫大な焦付きによって、文政以後米切手入替への融資は停止されている（松本四郎「幕末・維新时期における三井家大元方の存在形態」△「三井文庫論叢」第二号▽）。なお、同論文

で松本氏は、「この米切手入替による利息収入は短期融資で利廻りがよい」ことを指摘され、貸付先は鴻池屋庄兵衛・天王寺屋^(孫七)・加嶋屋作次郎、嶋屋利右衛門・米屋伊太郎の五人に限定されていたと報告され、大手の入替五軒であった。

(17) 拙稿「享保改革期の米価政策からみた江戸の位置——米会所存廢の顛末」——『史料館研究紀要』第十号

(18) 享保十六年五月「酉年御物成米金銀諸運上井戌年諸向納金銀を以戌年御払方御勘定帳」(大野瑞男「享保改革期の幕府勘定所史料、大河内家記録」)『史学雑誌』第八十編二号

(19) 笠谷和比古「幕藩制下に於る大名領有権の不可侵性について」『日本史研究』一八七号

(20) 前出注(16)参照。なお安岡重明「寛政・文化期における藩債処理にかんする草間直方の意見」(『同志社商学』第十四卷二号)には文化十一年四月草間伊助が肥後藩の御備金の運用に関して、米切手買持の安全性・有利性を強調し、加嶋屋分家(作五郎家)の登用を同藩に進言している史料が紹介されている。該時期は筑後蔵の空米事件審理の最中に当り、堂島が動揺を来しているにも拘わらずである。それは米切手に対する公権力の保証を前提とする当時の金融業者の認識であったといえよう。例えば、升屋小右衛門による仙台藩の財政建直しが如何なる仕法によったかは詳かでないが、海保青陵の「升小談」

に

「大坂に空米先納といふことあり、これ甚面白きことなり(中略)、しかるに貧なる屋敷にては、当年廻りたる米はとくにうつてもふて、今蔵にある米も其代金はとくにとりてもふておる、されども今金入用なれば、来々年くるはづの米の切手を今わたして代金を先納するを空米先納と云ふなり、これは甚丈夫なるもの也、ありもせぬ米の切手なれば、是はばうはんのよふなるもの也、ゆへに奉行所へは出されぬ切手也、出せば渡したる屋敷の罪になることなり、ゆへにきつと其切手は取りもどさねばならぬ也、故に大丈夫なるもの也、これは江戸にて座頭が家中へ金を借すときに、わざとばうはんをさせて借すと同じ伝なり、すでに空米先納といふ名あれば、これ借り方借し方も承知することなり」と記されている。

(21) 旧稿で紹介した三井大坂両替店の「聞書」では、買戻しを命じられた九歳の過米切手数は二万八千石余(約五七万四千俵弱)と記録されている。

(22) 注(20)の安岡重明氏の「史料紹介」には、草間伊助が近年の諸藩における藩債整理仕法を個別に列挙し、つづけて「右之余御三家様・加州様・薩州様・筑後・米子等初メ東西大小之諸侯方苛政之御仕法多ク、大抵無利足百年、百五拾年賦等有之、又甚數ハ肥前様ニ千年賦と申名目も有之候、右無利足之年賦と申義ハ銀主共甚迷惑成義

ニ而年々我がものを喰ヒべらす道理ニ而利足の恩義無之
ては年々難波仕、身上持かね申候、たとへ少分たりとも
利足頂戴仕候時ハいつ迄も借シ付銀之主意相立、先祖へ
之申分ケも有之事ニ御座候故、何卒御慈憐を加エられ少
分成とも利足ハ御付ケ被遣度ものと乍恐奉存候」と述べ
ているが、これらの大部分は堂島浜に對する藩債処理の
在り方を示すものと思われる。

付記

本稿の作成に當つては、手津屋林田家文書の所藏機關、
九州大学附屬九州文化史研究施設の藤野保先生・楠本美智子
氏・黒田安雄氏の方々にお世話になった。とりわけ丸山雍成
先生にはご多忙の御身にも拘わらず、一方ならぬご助力を賜
わった。また、久留米藩々政史料の調査に際し、史料の所在
について御厚配・御誘導と御援助を賜わった九州大学松下志
朗先生、久留米市民図書館小椎尾和子氏、久留米市史編さん
室田中俊博氏、古賀正美氏、ご所藏史料の閲覧を快くご許可
下さり、種々ご便宜をお与え下さった鶴久二郎氏に厚く御礼
を申し上げます。

次頁写真説明

次頁掲載の筑後蔵米切手（加嶋屋長田家文書）は、本稿でと
りあげた文化十一年の筑後蔵空米事件に関わる時期のものであ
る。出切手の体裁をとる文化九申年・同十四年の米切手は恐ら
く本稿一〇五頁に見える謀利の過米切手と推測される。七九頁
に述べた通り、手広く大名貸を営んだ加作店に残された大量の
諸藩からの借銀担保の米切手は、その大半が市場に流通性のな
い坊主切手である。このことは出切手担保の大名借銀は、何ら
かの形で償還されていたことを示すと思われる。

長期年賦かつ低利にもち込まれるケースの多かった浜方先納
に對して多く発行された坊主切手は、文化十一年の筑後蔵の場
合、加作店で付した該切手の上封に

「文化十一年五月廿六日

筑後浜先納四百石 此切手数四拾枚

代拾貳貫目 新 熊 名 前

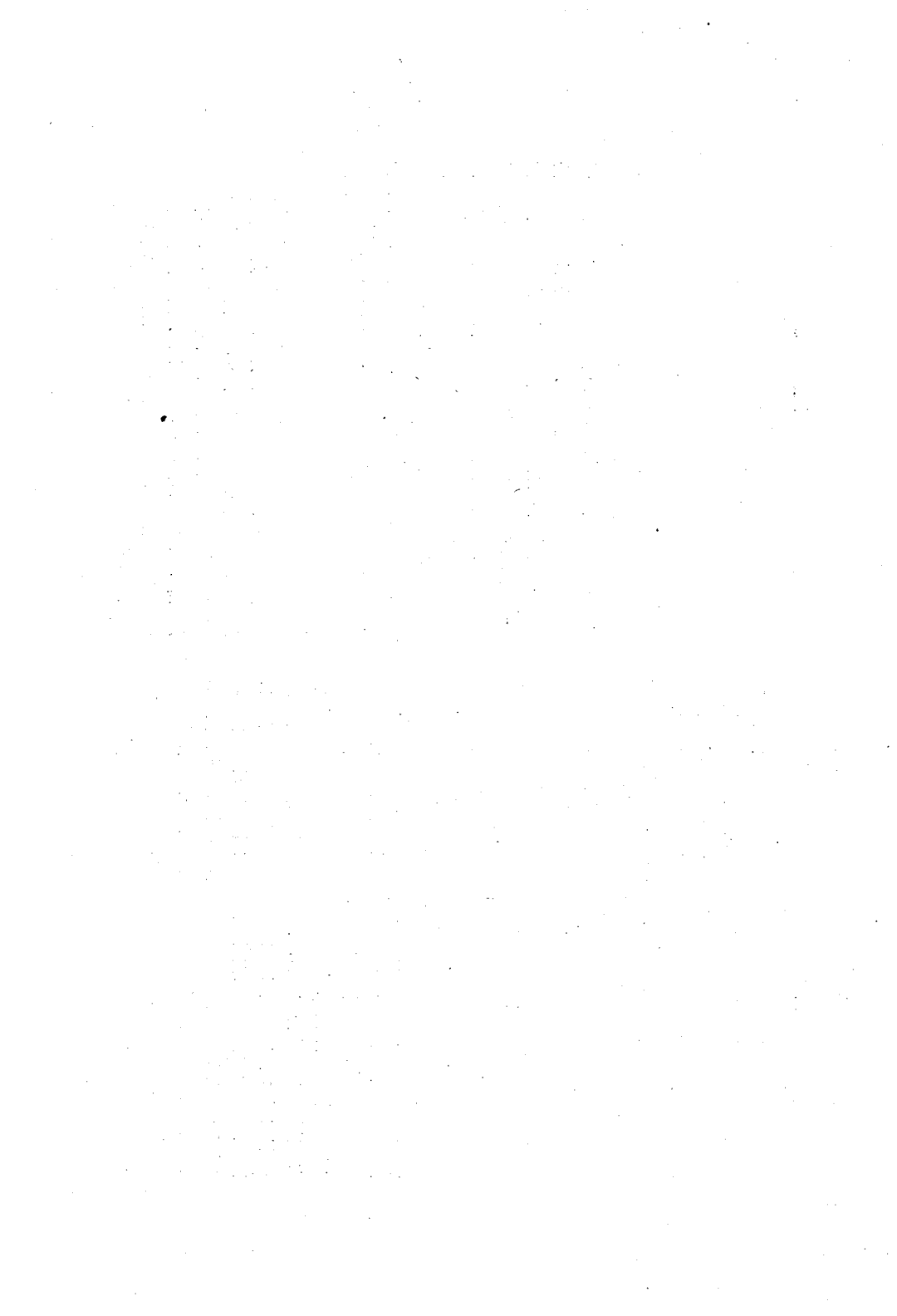
同人取次

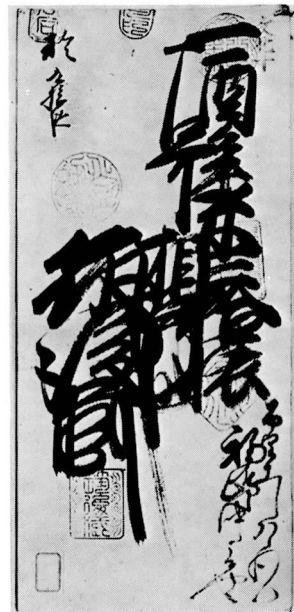
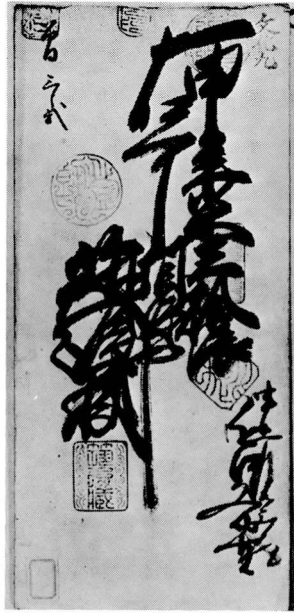
当酉十一月元利返済之義浜方一統え被相頼、元銀は置居ニ
相成候事

跡酉十一月より来戊五月限、月八朱半ニ相成候事

但し戊年米と切手書かへニ相成ル」

と託され、切手一枚の担保価格は銀三〇〇目（石当り三〇目）、
起債時には、酉年切手が発行され、半年後の返済期月には元銀
据置で、戊年米切手に書替えることで債務の不履行を糊塗した
ことが判る。





右上 筑後蔵申年出切手 文化九年申十一月二十三日札

近江屋又助買(堂島米仲買)

右下 筑後蔵酉年出切手 文化十年酉閏十一月八日札

福岡屋仲兵衛買(堂島米仲買)

左上 筑後蔵戌年浜先納切手(落札日付・落札人名がなく、坊主切手とも呼ばれる) 文化十一年

右の米切手のサイズは、いずれもタテ三〇センチ、ヨ
コ一三・五センチ(史料館所蔵、加嶋屋長田家文書)
(前頁説明参照)